世代の再生産の可能性から見た マイノリティの帰還の持続可能性
—ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦内の セルビア人帰還地域の調査結果に基づく考察—

材　木　和　雄

広島大学大学院総合科学研究科

Sustainable Return of Ethnic Minorities in Terms of Generational Reproduction: Serb Returnee Areas in the Federation of Bosnia and Herzegovina

Kazuo ZAIKI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract

In Bosnia and Herzegovina (BiH), out of an estimated 2.2 million people who were forcibly displaced during the ethnic war, more than 1 million exercised their right to return to their places of origin following the signing of the Dayton Peace Agreement in December 1995. Nearly half of them were “minority returnees” who returned to territory controlled by one of the other ethnic groups. Accordingly, the ethnic cleansing that occurred during the war was partially reversed. BiH succeeded in regaining the character of a multiethnic society to some extent.

However, the actual number of returnees, particularly for minority returnees, has been estimated to be considerably lower than the statistical figure. The reason is, that many returnees did not permanently stay in their places of return, primarily owing to the lack of economic opportunities there. In search of better socioeconomic opportunities, most young IDPs remained in the places of migrate. Returnees who went back and settled permanently in their places of origin were mostly the elderly and they tended to live in rural areas. There was thus no sustainable return for minorities. This conclusion was reached in previous studies about the return of refugees.

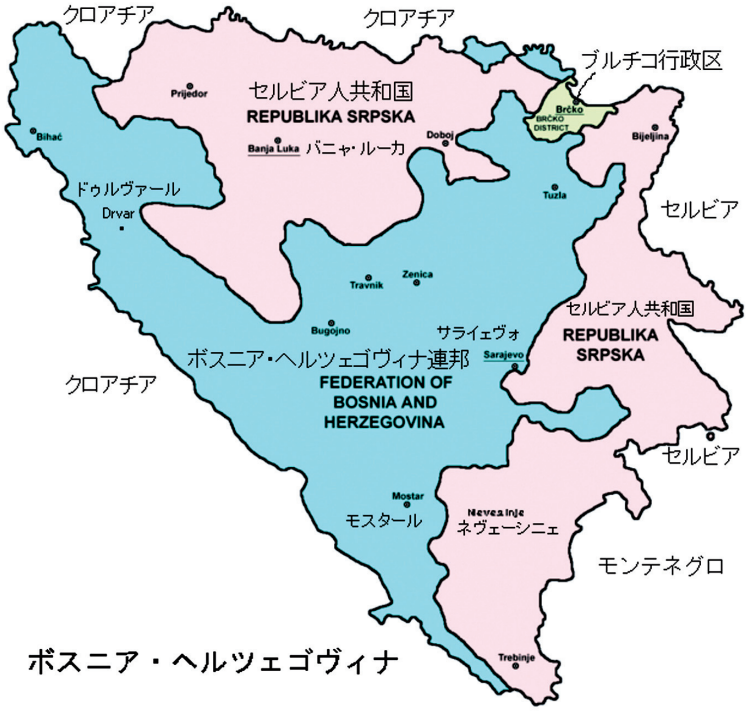
Nevertheless, in some areas in BiH, there do exist minority people who have remained permanently in their places of origin. They are people who did not leave their places of residence during the war or those who returned home soon after it ended. The question then arise as to whether they are going to have families in the near future. If they can, they can their minority communities may be sustained. If they cannot, their current communities will disappear at some

point. The answer to this question requires empirical studies.

In this paper we examine the results of field research conducted in two areas of the Federation of Bosnia and Herzegovina, one of the units of state (entity) where the Bosniaks and Croats politically predominate. One area was in a suburb of Mostar, the other was in a suberb of Drvar. Living in the former are middle-aged and elderly people but there are also younger residents. Here there are families with children who were born in the postwar period. With the other area, though Drvar had the largest number of Serbs returnees in the Fedeartion, almost all the returnees were middle-aged and elderly. It is thus possible to observe generational reproduction in the Mostar suburbs, but not in the suburbs of Drvar.

We found that this difference between the two cities derives from differences in their socioeconomic structure and convenience. Mostar has a decided advantage over Drvar in such factors as population size, employment opportunities, size of consumer market, opportunities for higher education, and healthcare environment.

However, Drvar does have a striking advantage over Mostar in another way. In Drvar the Serbs hold political power in the local municipality, because they constitute the vast majority of the city's population. That provides a sense of security to Serb returnees and encourages them to reside permanently in their places of origin. In Mostar, though the Serbs who constitute a small portion of the population are virtually excluded from political decisions in governing the municipality. This works to the detriment of the Serb inhabitants in various aspects. Therefore, it appears that the process of generational reproduction of returnees in the suburb of Mostar will not reach stability without a substantial improvement in the situation.



1　はじめに

ボスニア・ヘルツェゴヴィナは旧ユーゴスラヴィア連邦の時代には模範的な多民族共和国として知られていた。多くの都市ではイスラームのモスク、セルビア正教会およびカトリック教会の建物が街中に近接して屹立し、この国における多民族の共存・共生を象徴していた。内戦前の1991年の民族構成はボシュニャク人43.5%、セルビア人31.2%、クロアチア人17.4%であり、人口の過半数を占める民族がいなかった。これらの主要三民族は憲法が対等・同権を保証し、いずれの民族も政治的にマイノリティではなかった。

この状況を根本的に変えたのが1992年に起こった内戦である。ボスニア内戦の際だった特徴は、民族的に均質な支配地を形成・拡大するために各民族が戦ったことである。そのため、各民族勢力は程度に差はあるが相互に民族浄化（ethnic cleansing）を実行し、その支配地域から他民族の住民を追い出した。居住地から追い出された人びとは自民族が支配する地域や隣国に逃れるか、第三国に渡り庇護を求めた。その結果、内戦前の人口の半数を超える220万人の難民・国内避難民が発生した。ボスニアの内戦が終結したとき、各民族の支配地域は単一民族に純化した空間に変えられていた。内戦は多民族の共生社会を文字通り、根こそぎに破壊した。

4年に及んだ内戦は欧米諸国の介入と仲介によって終結した。各民族の政治的指導者は包括的な和平協定文書を取り交わした。これがデイトン和平協定である。同協定は1995年12月に発効した。デイトン和平協定は難民の帰還の権利を実現し、多民族の共生社会の復元することを重要な目標とした。これは、それぞれの民族主義勢力が他民族の住民に対し実行した民族浄化とその結果を国際社会が容認せず、紛争前の状態に戻そうとしたことを意味する。

その一方で、デイトン和平協定は統一国家の枠組みを維持しながらも、この国を構成体（entitet）と呼ばれる2つの自治単位と領土に分割した。その一つはボシュニャク人とクロアチア人の住民を中心とするボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦（Federacija Bosne i Hercegovine）であり、もう一つはセルビア人の住民を主体とするセルビア人共和国（Republika Srpska）である。両構成体は国家に近似した統治機構をもち、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは事実上、連邦制に近い国家構造をとる[1]。さらにボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦の内部には独自の行政府をもつ10の県が設置された。これらの県はまたボシュニャク人中心の県、クロアチア人中心の県、両民族混合の県に分かれる。

このような複雑な国家形態は各民族勢力の合意を取り付けるために、内戦によって各民族が獲得した支配地域の維持を欧米諸国が承認した結果であった。だが、そのためにボスニアの三民族は地域によってマジョリティ（多数派民族）になったり、マイノリティ（少数派民族）になったりした。これに伴い難民の帰還は「マジョリティの帰還」と「マイノリティの帰還」に分かれた。マジョリティの帰還とは自民族の政治勢力が支配する地域への住民の帰還であり、マイノリティの帰還とは他民族の政治勢力が支配する地域への住民の帰還である。ボスニアのように民族間の内戦が起こった国では、マジョリティの帰還に比べてマイノリティの帰還がより大きな困難を伴うことは明らかである。実際、各地の民族主義勢力はマイノリティの帰還を妨害し、民族浄化の結果を固定化しようとした。

そのため、内戦終結後の数年間はマイノリティの帰還はなかなか進まなかった。これに対し、国際社会を代表してデイトン和平協定の履行を監視する権限を与えられた上級代表事務所（Office of the High Representative：OHR）は和平協定の履行を促進する法案を強制発効させたり、和平協定の履行の障害とみなされた公職者（政治指導者や行政機関の担当者）を解任したりして、ボスニアの内政に積極的に介入した。その結果、2000年代に入ってマイノリティの帰還は大きな進展があった。

年次的にみると、難民・国内避難民の帰還者の累計数は2004年に100万人の大台に達し、それ以降には帰還者数は大きく減少した。とくに2008年以降の帰還者数は毎年1千人台にとどまる。どの民族の帰還も散発的な規模であり、内戦終結後

の10年間で難民の帰還プロセスはほぼ完了した。約103万人の難民・国内避難民の帰還者のうち、マジョリティの帰還は559,462人（54.4%）、マイノリティの帰還は469,594人（45.6%）であった。マイノリティの帰還の支配地域別の内訳は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦275,247人（58.6%）、セルビア人共和国172,252人（36.7%）、ブルチコ行政区22,095人（4.7%）であった。セルビア人共和国のマイノリティの帰還者数は1991年のマイノリティ人口（セルビア人を除く人口）699,460人の24.6%に当たる。

ここまでの難民の帰還の結果をどう見るか。難民の帰還に関する先行研究からは次の2点が明らかになっている。第1に内戦前の水準には及ばないが、マイノリティの帰還は一定程度実現し、それに応じて人口構成の多民族的性格が多少とも回復したことである。この点では国際社会の努力は民族浄化の結果をある程度修正することに成功したと見ることができる[2]。ところが、第2の点として、マイノリティの帰還者のかなりの部分は実際には元の居住地に常住していないことが指摘されている。これは就業機会などの「持続的な帰還（sustainable return）」の条件が欠け、生活を再建できないためである。帰還住民の中には、取り戻した住宅を売却したり、賃貸に出したりする人も多く、それができない場合には空き家にしておく人も少なくなかった。いずれにせよ帰還者の中には元の居住地に常住していない者が多い。元の居住地に常住する帰還者は年配者に偏り、農業で自活ができる農村地域に多い。若い世代の多くは出身地域では得難い良好な教育機会や社会・経済的機会に惹かれ、避難先の地域に留まっている。そのため、マイノリティの帰還は統計上の数字を額面通りに受け取ることはできない[3]。

こうした傾向は私の調査でも確認され、異論はない。だが、現地を訪問してもう一つ観察できる事実は元の居住地に常住するマイノリティも存在することである。彼らは内戦中に居住地にとどまった人びとか、または比較的早く元の居住地に戻ってきた人びとである。難民の帰還に焦点を当てた先行研究はこのような残留者に注目してこなかった。彼らは難民にならなかった人びとか早期の帰還者であるので、それは当然のことかもしれない。しかし、もしボスニアにおける多民族社会の再建の動向に研究者が関心をもつ場合には彼らの存在にもっと大きな注目を寄せてよいはずである。なぜなら、難民の帰還がほぼ終了した現在では残留するマイノリティ住民の存在こそがその地域の単一民族化の進行に歯止めをかけ、多民族的社会的な性格の維持に貢献しているからである。

これらのマイノリティの残留者をどう見るか。彼らはその世代限りの人びとか。それとも世代的な再生産が可能な世帯なのか。これは統計的な数字だけでは判断できない問題である。これを判断するには現地住民の生活実態に対する社会調査が必要である。

内戦終結後にマイノリティの帰還に研究の焦点が当てられたのは至極当然である。個別にみた場合にはマイノリティの帰還が完了していない地域もあり、今後も彼らの帰還を注視する必要性はある。しかしながら、和平協定の締結から20年近い年月が経過した現在ではこれまでとは異なった視点からの研究が求められている。それはマイノリティの残留者の動向に焦点を当てた研究である。難民の帰還が終わった段階では、ボスニア・ヘルツェゴヴィナが今後にどのような形の社会を形成することになるのかはマイノリティの残留者の今後の動向にかかっている。たとえば、マイノリティの持続的な残留と世代的な再生産があるならばボスニア・ヘルツェゴヴィナは多民族社会的な性格を維持できるだろう。そうでなければ多民族性の回復は一時的な現象にとどまり、時間の経過とともに民族純化が進行していくと予想される。私はこの国の社会が近い将来にどのような方向に進むのかを探るため、各地でマイノリティ住民の帰還と残留の実態を明らかにする調査を続けてきた。

このうち本稿ではボシュニャク人とクロアチア人が政治的に支配するボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦の2つの地域で実施した調査結果を紹介したい。1つはモスタール郊外の帰還地域である。ここでは少数派民族のセルビア人が持続的に残留し、世代的な再生産の可能性が見えている。もう一つはドゥルヴァールとその郊外地域である。

ドゥルヴァールはボスニア連邦でセルビア人の帰還者がもっとも多い地域であるが、郊外の帰還地域では中高年世代の住民が大部分を占め、世代的な再生産の可能性が見えない。これらの地域の比較検討を通してマイノリティの残留と世代的な再生産の条件を探ることが本稿の課題である。

2　モスタール周辺部におけるセルビア人の帰還と残留

2-1　町の概況

モスタール（Mostar）はボスニア連邦を構成する県の一つであるヘルツェゴヴィナ・ネレトヴァ県の県都であり、この国の南部に位置するヘルツェゴヴィナ地方の最大の都市である。市内には北から南へネレトヴァ川が流れ、多くの美しい石橋（現地語でモスト、Most）で東西の市街地が結ばれている。このことから町の名前が生まれた。

1991年の人口調査によると、モスタールの人口は126,628人、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国では5番目に大きな都市であった。当時の民族別の人口構成は次の通りである。ボシュニャク人43,856人(34.6%)、クロアチア人43037人 (34.0%)、セルビア人23,846人 (18.8%)、ユーゴスラヴィア人12,768人 (10.1%)、その他3121人 (2.5%)[4]。この民族構成から窺えるように、内戦前のモスタールは多民族が混住し、共生する典型的なユーゴスラヴィアの都市であった。

1992年4月にモスタールで戦闘が開始されたとき、ユーゴスラヴィア人民軍を主体とするセルビア人勢力は優勢に戦いを進め、一時は市内の大部分を支配下に置いた。しかし、クロアチア人勢力とボシュニャク人勢力はまもなく反撃を開始し、1992年6月にユーゴスラヴィア人民軍を市内から退却させることに成功した。セルビア人勢力の撤退に伴ってモスタールに居住するセルビア人は一斉に町を離れた。彼らの大半は東ヘルツェゴヴィナのセルビア人の支配地域に逃れたが、隣国のセルビアやモンテネグロへ逃れた者も少なくなかった。

クロアチア人勢力とボシュニャク人勢力はしばらくの期間、合同でセルビア人勢力と戦闘を続けていた。しかし、セルビア人勢力が完全撤退した後、1993年5月にクロアチア人勢力（クロアチア防衛評議会Hrvatsko vijeće obrane：HVO）はモスタールのボシュニャク人勢力（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国軍Armija Republike Bosne i Hercegovine：ARBiH）に奇襲攻撃を仕掛けた。クロアチア人勢力の狙いはモスタールからボシュニャク人を追い出し、この町を自称の独立国家（ヘルツェグ＝ボスナ・クロアチア人共和国：Hrvatska Republika Herceg-Bosna）の首都とすることであった。しかし、まもなくボシュニャク人勢力は反撃を開始し、ボスニア中部およびヘルツェゴヴィナ地方でHVOとARBiHは全面的な交戦状態に入った。ボスニア内戦の第二幕の始まりである。

クロアチア人勢力は当初は優勢であったが、ボシュニャク人勢力も体勢を立て直し、頑強に抵抗を続けた。このため1993年の夏以降に両勢力の戦いは膠着状態に陥ったが、モスタール以外の戦線ではARBiHの反攻によってHVOは次第に劣勢になり、兵士の士気も低下した。ボスニアのクロアチア人勢力をてこ入れするため、1993年12月にクロアチアは正規軍の増派をおこない、ボスニア内戦に露骨に介入する姿勢を示した。しかし、これは国際社会の大きな反発と非難を招き、停戦を求める国際社会の圧力によってクロアチア人勢力は身動きがとれなくなった[5]。

1994年2月、HVOはARBiHに停戦を申し入れ、両軍の間で停戦協定が成立した。これを基礎にアメリカの仲介によって1994年3月、クロアチア人勢力とボシュニャク人勢力との間で和平協定が結ばれた。ワシントン協定（現地語Washingtonski sporazum、英語ではWashington Agreement）と呼ばれる。この協定では、ボスニアの領土の中でボシュニャク人勢力が統制下に置く地域とクロアチア人勢力が実効支配する地域を合体させてボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦を創設し、その中に自治的な行政府をもつ10の県（Kanton）を設置すると定められた。この協定ではモスタールは特別の地位が与えられた。またモスタールの再建と政治的再統合を図るため、欧州連合による紛争解決

のための特別ミッションがこの町に派遣されることになった。

1995年12月にボスニア内戦は終結し、モスタールの再建が開始された。しかし、モスタールの東西分断は続いた[6]。クロアチア人が支配する西部地域とボシュニャク人が支配する東部地域はそれぞれ独立の行政組織をもち、水道・下水・電気などのインフラストラクチュア、電話・郵便・市バスなどの公共サービス、学校、病院や診療所などのヘルスケア、警察を別個に管理運営している。モスタールの市民は同じ都市に居住しながらも、居住地域によって税金や料金を別々の組織に支払っている。

内戦前と比べてモスタールの人口および民族構成はどのように変化したか。ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは2013年10月に内戦後初の人口調査が実施された。その結果速報によると、2013年のモスタールの人口は113169人、内戦前の1991年に比べ約15000人減少した[7]。しかし、現時点では基礎自治体単位の人口は公表されているが、民族構成は公表されていない。現地での新聞報道によると、内戦中および内戦後にクロアチア人勢力は他の地域に居住していたクロアチア人を呼び寄せて、モスタールの相対的に多数を占める民族となったもようである。ボシュニャク人は外国に移住した者がいたため、内戦前に比べて人口数はやや減った[8]。セルビア人は2000年代に帰還者が増えたが、4000人から5000人程度と現地の人びとは見積もっている。内戦前の人口の6分の1程度である。いずれにせよ確かなことはモスタールの人口減少の最大の要因は内戦中にモスタールを立ち去ったセルビア人住民の大半が帰還しなかったことにある。

2-2 ヴラプチッチ

ヴラプチッチ（Vrapčić）はモスタールの中心部から北へ5キロ離れた郊外地にある比較的大きな集落である。内戦前の1991年の住民は3462人であり、うちセルビア人1952人（56.4%）、ボシュニャク人802人（23.1%）、クロアチア人485人（14.0%）、ユーゴスラヴィア人148人（4.3%）、その他148人（2.2%）であった。現在ここはボシュニャク人が支配する東部地区にある。内戦中にこの地区のセルビア人の住宅はすべて略奪され、放火ないし爆破された。かつてセルビア人が居住していた場所には現在も破壊された住宅の残骸があちこちに放置されている。もっとも、幹線道路に近い場所ではきれいにペンキを塗られた新築の住宅も多く見られる。これらはボシュニャク人の住宅である。住宅を再建できない、あるいは帰還の意思がないセルビア人難民の中には土地を手放した者がいる。この地区は中心街に近接し、立地条件がよいために住宅需要がある。購入者はボシュニャク人である。そのためにこの地区ではボシュニャク人の人口が増えている。

この地区のセルビア人帰還者の住宅は山の中腹に点在し、居住条件が悪い場所にある。たとえば、

写真1 ネレトヴァ川から臨むモスタール市内(右側=東岸がボシュニャク人の居住地域)

写真2 内戦時に前線となったモスタールの幹線道路、右側は再建されたギムナジウム、左側は再建中の建物

セルビア人難民の帰還を支援する「モスタールへのセルビア人の帰還のための連合」（Udruženja za povratak Srba Mostar）の活動家であるヴラード・ヴーチッチ（Vlado Vučić、1947年生）氏の住宅は山腹の小道を数百メートル横に行ったところにある。ヴーチッチ氏はこの地で生まれ、大学を卒業後にモスタールの機械工場で技術者として就職した。内戦中はセルビア人勢力が支配していた南

写真3 山腹に残る破壊され放置されたセルビア人住民の住宅

写真6 再建されたミラン・アンテリ家の住宅

写真4 再建されたが外装が未完成のマノイ・アンテリ氏の住宅

写真7 祖母のュービツァ・アンテリ、二人の娘、二人の孫

写真5 両親の墓の横に立つヴラード・ヴーチッチ氏

写真8 アンテリ一家の希望の星、セレーナ・スーシャ

東の町ネヴェーシニェ（Nevesinje）に逃れたが、2002年に独力で住宅を再建し、帰還した。父母は内戦前に死亡し、弟の家族はモスタールを去り、オランダで生活している。彼自身は生涯独身であり、両親の死亡後は一人暮らしになった。ヴーチッチ氏は現在、年金生活である。またヴーチッチ氏の友人のマノイ・アンテリ氏（Manoj Antelj, 1953年生）の住宅も山の中腹にある。アンテリ氏は2009年に政府の助成金を得て住宅を再建し、帰還を果たした。現在は妻のミレーナ（Milena、1955年生）と二人暮らしであり、年金生活をしている。二人の息子は避難先のガチコ（Gacko）で就職し、そこで定住している。政府の助成は最低限の居住環境を確保するための建築資材とその組み立てである。そのため、アンテリ氏の住宅は煉瓦ブロックがむき出しの状態である。外壁を塗る資金がないという。それでもアンテリ夫妻は自宅を再建し、郷里に再び戻ることができたことを非常に喜んでいる。

ヴラプチッチのセルビア人住民はヴーチッチとアンテリの姓を持つ者が大半であり、彼らは数百年前からこの土地に居住する。集落にはこの土地のセルビア人の墓地があり、19世紀の初めに作られたものが残っている。どこの墓地でもそうであるが、ここでも年に一度、セルビア正教の祝日の一つである聖ペテロの日（7月12日）に合わせてこの土地を離れたセルビア人が亡き家族の墓参りのために戻ってくる。日本のお盆に似たような習慣である。そのために墓地の管理を任されているヴーチッチ氏は定期的に掃除や草刈りをしている。

ヴラード・ヴーチッチ氏やマノイ・アンテリ氏は年金生活者であるが、この集落には内戦後に生まれた子どもがいる世帯も存在する。その一つがミラン・アンテリ氏の一家である。2013年7月に私が訪問したときに世帯員は6人であり、やや変則的な三世代家族を構成していた。世帯主のミラン・アンテリ（Milan Antelj、1939年生）、その妻リュービッツァ・アンテリ（Ljubica Antelj、1942年生）、その長女サーニャ・シーミッチ（Sanja Simić、1966年生）、その娘のドラガナ・シーミッチ（Dragana Simić、2002年生）、ミラン・アンテリ氏の次女のヴァーニャ・スーシャ（Vanja Suša、1972年生）、その娘のセレーナ・スーシャ（Selena Suša、1997年生）である。

1992年にセルビア人勢力がモスタールを撤退した後、アンテリ一夫妻と二人の娘はヴラプチッチを脱出し、セルビア人が支配する地域であるネヴェーシニェに避難した。アンテリ氏は2005年に住宅を再建し、妻を呼び寄せて郷里のラプチッチに帰還した。この間に二人の娘は結婚し、それぞれ別姓を名乗り、別居していた。しかし、その後に次のような事情で二人の娘とその子どもはアンテリ夫妻と同居することになった。一つは長女のサーニャ・シーミッチが体を悪くしたことである。病名は語らなかったが数回手術を受けたという。しかし、その後も全快せず、介助なしでは歩行が困難な状態になった。サーニャの夫は単身赴任で隣国のモンテネグロの鉱山で働いており、妻子のいる家にはたまにしか帰ってこない。もう一つは次女のヴァーニャ・スーシャが未亡人になったことである。彼女の夫はネヴェーシニェの企業で働いていたが、勤務中に事故で亡くなった。

一家の収入源はアンテリ夫妻の年金、サーニャ・シーミッチの夫からの仕送り、ヴァーニャ・スーシャの遺族年金である。サーニャは仕事ができる状態ではなく、ヴァーニャは無職である。アンテリ夫妻は定年まで働くことができなかったため、年金の額は少ない（夫婦で月に600KM、300ユーロ程度）。しかし、娘の夫の仕送りがあるので一家としては何とか生計を維持できているという。

一家の希望の星はアンテリ氏の次女ヴァーニャの娘のセレーナ・スーシャである。2013年7月に私が会ったときにセレーナは16歳、モスタール市内のギムナジウム（普通科の中等学校）に通い、1年次を修了したばかりであった。彼女は非常に勉強がよくできる。初等学校ではすべての科目の成績が最高点の評価5であった。ギムナジウムでもトップクラスの成績を維持し、「学年の誇り」（Ponos generacije）と呼ばれる称号を1年次に獲得していた。将来の進路の第一志望はモスタール大学医学部に進学し、医師になることである。もちろん医師以外の仕事に就く可能性はあるが、いずれにしても他の町に行くつもりはなく、モス

タールで就職をしたいと語った。進学するためには奨学金の獲得が不可欠であり、そのためにがんばって勉強をしているという。リュービッツァ・アンテリによれば、サーニャの娘のドラガナ・シーミッチも初等学校の成績は非常に良く、いとこのセレーナを追いかけるように勉強を頑張っているという[9]。

2-3 バーチェヴィチ

バーチェヴィチ（Baćevići）はモスタールの中心部から南へ9キロ離れた近郊農村である。この土地には15世紀のオスマン・トルコの征服以前から正教徒（後のセルビア人）が入植していた。内戦前にはモスタール最大のセルビア人居住地区であり、住民の民族構成は異民族間結婚で入ったクロアチア人を除くと100%がセルビア人だった。内戦中のセルビア人勢力の撤退に伴い、500人超の住民はすべて危険を避けるため、この土地を去った。その後にクロアチア人勢力によって住宅は略奪され、放火ないし爆破された。しかし、1998年から一部の住民は帰還を開始した。これはモスタール周辺地域では最初のセルビア人難民の帰還であった。バーチェヴィチでは2000年に電気が復旧し、これ以降に住民は本格的に帰還を開始した。2014年7月の時点で内戦中に破壊された120戸の住宅のうち87戸が再建され、200人程度が常住している。帰還していない住民の中にも近い将来にバーチェヴィチに帰還し、住宅を再建したいと考える人びとがかなりいるという。

この地域を案内し、これまでの生活史を詳細に語っていただいたのはドゥーシャン・ゴーロ（Dušan Golo、1952年生）氏である。同氏は「モスタールへのセルビア人の帰還のための連合」副代表を務める。ゴーロ氏は兵役を終えた後にモスタール大学の経済学部を2年で中退、1976年に近隣の企業「ソーコ（SOKO）」に就職した。ソーコは各種の戦闘機や軍用機、ヘリコプターを製造し、ユーゴスラヴィア人民軍に納入していた軍事企業であった。最盛期には8000人の従業員（うちモスタールの工場に5000人）を雇用していた。この企業は内戦中に大半の設備は略奪と破壊を被った。しかし、現在も自動車部品の製造企業として細々と操業を続け、従業員は450人程度である。

ドゥーシャン・ゴーロ氏はこの企業で営業の担当者として働き、製品の受注や納品の仕事に携わっていた。同時に政治活動にも参加し、1982年から1990年まで二期8年間、モスタールの市議会議員を勤めた。1980年にゴーロ氏はソーコの同じ部署で働いていた女性ラドミーラ（Radmila、1957年生）と結婚、1984年にモスタール市内に日本でいえば社宅に相当するアパートメントを取得した。夫妻の間には二人の娘と一人の息子がいる。

内戦開始後の1992年6月にゴーロ氏はその妻子、両親、弟・妹と共にセルビア人勢力の支配地域のネヴェーシニェに避難した。避難先ではゴーロ氏は国際赤十字社が供給する人道支援物資を避難民に配給する仕事に従事した。報酬は他の避難民よりも多く受け取ることができる食料品（小麦粉や粉末のジャガイモなど）であった。この間、1994年に父親は避難先で死亡した。

ゴーロ氏の一家は1998年にモスタールに帰還した。アメリカ政府の助成金を得て、バーチェヴィチの実家を再建できたためである。ゴーロ氏の弟は障害者であり、寡婦の母と弟の名前で住宅再建のプログラムに応募し、助成金を獲得した。ただし再建できたのは内戦前の家屋（120㎡）の一部（50㎡）であり、その他の部分は破壊されたままである。2001年にゴーロ氏は内戦中からボシュニャク人が占拠していたアパートメントを取り戻し、妻子と共にモスタールの市内に戻った。

ゴーロ氏の妻のラドミーラは帰還の直前に一大決心をした。それは警察官の仕事を目指したことである。その資格を取るため、2000年1月に彼女は単身で首都サライェヴォに行き、警察学校（Policijska akademija）に入学した。当時、国際社会との取り決めによって、ボスニアの各地の警察署はかつての住民の民族構成を反映した人員配置が求められていた。モスタールではセルビア人の警察官が不足していた。セルビア人の警察官は内戦中にセルビア人勢力に加担したため、戦犯としての訴追を恐れて帰還する者はいなかったからで

ある。そのため、セルビア人の警察官は今後に新規採用が見込まれた。ラドミーラはそこに自身が就職するチャンスがあると考えた。その読みは正しかった。彼女は警察学校の課程を修了し、実地訓練を終えるとすぐにモスタールの警察署に採用された。2001年1月のことであった。彼女は内戦後のモスタールの警察署では最初のセルビア人女性の警察官であった。それ以来、妻のラドミーラはゴーロ一家の生計を支え、家族を扶養した。当時はまだ治安が完全に回復した状態ではなく、警察官は危険な任務に当たることもあった。ただし、現在では彼女は警察署の内部で管理業務を担当している。

ゴーロ氏の長女のスラージェナ（Slažena、1980年生）もまた就職を考えた進路選択をした。彼女はいわゆるITスキルを備えた図書館司書になることを目指した。そのため、セルビアのベオグラード大学の言語学部（Filološkog fakulteta Univerziteta u Beogradu）を受験し合格、同学部の司書・情報学科を卒業した。ボスニアの大学にはITスキルを備えた図書館司書を養成する学科はなかった。他方で当時、ボスニアの図書館でもコンピュータによる蔵書の管理を進めていたが、コンピュータやプログラミングに詳しい司書は皆無であった。現場の図書館ではどこでもそのようなスキルを備えたスタッフを求めていた。そのため、スラージェナは卒業後に日本のハローワークに相当する就業斡旋局（Biro za zapošljavanje）に求職登録をするとすぐに市内の図書館で司書になることができた。唯一の問題はセルビアのベオグラード大学の卒業資格をボスニア国内の通用する資格として認定してもらうことに若干の時間と手間を要したことだけであった。スラージェナは2006年にベオグラード大学で知り合った同郷のセルビア人男性と結婚した。夫のプレドラグ（Predrag、1980年生）もバーチェヴィチの出身であったが、幼い頃は親しい知り合いではなかった。しかし、二人はセルビアでたまたま同じ大学に通うことになったので親密な関係になったという。プレドラグはベオグラード大学で電気工学を専攻し、卒業後にモスタール市内で営業しているイタリア資本の銀行、ウニクレーディト・バンク（UniCredit Bank）に就職した。電子機器のメカニズムに強いことが就職の決め手になったという。夫婦の間にはアンドレイ（Andrej, 2007年生）とルーカ（Luka, 2011年生）の二人の息子がいる。

次女のスネージャナ（Snežana、1981年生）はモスタール大学経済学部を卒業後、公営企業のボスニア連邦道路公団（JP Autoceste FBiH）でボランティアのスタッフとして働き始めた。その後に彼女は有期の雇用資格で4年間働き、2012年から期間の定めのない雇用の職員になった。ボスニア連邦の法律によると、有期の雇用は2年間に限定され、それは2年間延長することが可能である。しかし、それ以上の延長は認められず、事業者は契約職員を期間の定めのない雇用にするか雇用契約を打ち切るかの選択を迫られる。スネージャナは雇い止めにならず、期間の定めのない雇用の職員になった。ボスニア道路公団は公営企業なので連邦の民族構成を反映した職員配置が求められる。このことがこれまでの仕事ぶりがよかったことに加えて、彼女が正規の職員に採用された要因だとゴーロ氏は述べている。

ゴーロ氏の末子で長男のプレドラグ（Predrag、1990年生）はまだモスタール大学法学部に在学中である。彼はもともと医療系の学校で勉強していたが、医療従事者になることをやめて、法学部に入学した。法学部の卒業生は需要が少なく、きわめて就職難である。親の立場としては就職がしやすい医療系コースに進学してほしかったが、最後は本人の希望と選択になるので仕方がないという。

ところでドゥーシャン・ゴーロ氏自身は1992年に勤め先の「ソーコ」の職を失ってからは一度も就職できなかった。彼は現在も失業者の身分であり、就業斡旋局に定期的に通い求職登録を更新しているが、もはや年齢から見て就職の見込みはないと考えている。しかし、就職のチャンスはなかったわけではない。ゴーロ氏は内戦前に市議会議員を務めていたため、モスタールの政治指導者の間では名前がよく知られていた。そのため、クロアチア人の政党からボシュニャク人の政党に至るまであらゆる政党から党員に加わるように誘いを受けた。各党ともセルビア人の候補者を名簿に

登載する必要があったからである。政党の党員になれば、そのコネクションによってどこかの企業に就職できることは容易に想定された。しかし、ゴーロ氏はあらゆる政党の誘いを断った。その理由は、政党の党員になって市議会の議員になっても自らの考えで行動できないことにあった。党員になれば党の方針に従って行動しなければならない。どの党も候補者名簿にセルビア人の氏名が必

写真9 ドゥーシャン・ゴーロ氏と息子のプレドラグ(左側)

写真12 ミロスラヴ・ゴーロ氏の一家

写真10 ドゥーシャン・ゴーロ氏の長女のスラージェナと孫のルーカ

写真13 右はミロスラヴ・ゴーロ氏の娘のヨヴァーナ、左はその従姉妹のマヤ・ゴーロ。

写真11 再建されたドゥーシャン・ゴーロ氏の生家の住宅

写真14 ミロスラヴ・ゴーロ氏の農地

要なだけであり、セルビア人住民の利益に沿った政策を実行する意思はない。政党の方針に反して自らの考えで行動すれば直ちに除名されるだけである。だから、今後もどこの政党にも加わる意思はないとゴーロ氏はきっぱりと述べる。

帰還後にゴーロ氏はボランティアでセルビア人帰還者の支援の仕事をする以外には実家の農地で農作業に従事している。2012年に実家に住んでいた母親と弟が相次いでなくなったため、日中は毎日実家で過ごしている。農業では自家消費用の野菜と果樹（桃とスモモ）を栽培するほかに、販売用の作物としてジャガイモと果樹（ブドウとアンズ）を栽培している。2009年にバーチェヴィチに農業協同組合が設立された。ゴーロ氏を始め近隣の農家が生産するジャガイモは農業協同組合を通してノルウェーに輸出されている。果樹からはラキヤを製造し、一部を販売している。現在耕作しているのは1.5ヘクタールであり、機械設備があれば人を雇って10ヘクタールぐらいまで規模を拡大できると述べる。ここでは帰還しなかった住民が残した土地や耕作されていない土地がいくらでもあるからである。

ドゥーシャン・ゴーロ氏のソーコでの勤続年数は16年であり、年金の受給資格に最低必要とされる20年には4年足りない。ゴーロ氏は最初に面談した2013年時には年金受給をあきらめていると述べていた。しかし、2014年に再度面談したときには、考えを変えて2014年7月から掛け金の追納を開始したと述べた。3年分は政府が特典として供与するので残りの13ヶ月分を納付すればよいという。毎月の掛け金は255KM（128ユーロ）であり、当地では少なくない金額だが妻がお金を出している。そうすれば65歳から300KMの年金を受給できる。実は法律改正により、このような追納制度ができたのは6，7年前だった。妻からはずっと制度の利用を勧められていたが、最近になってようやくその助言に従う決心ができたという。このような自分はいつも他人の人助けばかりして自分のことをまったく考えないと妻子から笑われているとゴーロ氏は述べている。

次にドゥーシャン・ゴーロ氏の実家の向かいに住むミロスラヴ・ゴーロ氏の一家を訪問した。ミロスラヴ・ゴーロ（Miroslav Golo、1962年生）も内戦前に軍用航空機製造企業「ソーコ」に勤務し、錠前師（Bravar）として働いていた。内戦開始後の1992年6月、セルビア人勢力の撤退に伴い両親・兄と共にセルビア人勢力の支配地域のネヴェーシニェに避難、半年後にトレービナ（Trebina）に移動、そこで1995年に結婚した。1998年から住宅の再建に着手し、2000年に電気が回復したので妻子と共にバーチェヴィチに帰還した。妻のヴェセリンカ（Veselinka、1962年生）は内戦前にはモスタールの企業の経理係として働いていたことがあるが、現在は無職で専業主婦である。一家の収入源は農業である。彼らは2ヘクタールの農地を耕作し、小麦、トウモロコシ、ジャガイモ、赤かぶ、甜菜を植える。また家畜として豚と鶏を飼育している。

内戦後に生まれたミロスラヴ・ゴーロ氏の一人娘のヨヴァーナ（Jovana、1999年生）は私が会ったときには初等学校を卒業したばかりであったが、2013年9月からギムナジウム（普通科の中等学校）に通っている。バーチェヴィチには初等学校はないので、彼女はこれまでモスタール市内の初等学校に通学していた。クラスでセルビア人は彼女一人であったが、クロアチア人の同級生とは仲良く友達付き合いをしていた。唯一の問題といえば「信仰の時間」であった。彼女はセルビア正教徒なので、カトリックの信仰を教える授業には参加せず、いつも別室で自習をしていたということである。今後の進路希望を尋ねたところ、将来のことはまだ分からないが、地元の大学に進学し、モスタールで就職して、この土地に住み続けたいと考えていると述べた。

なおミロスラヴ・ゴーロ氏の住宅の隣には兄のボーロ・ゴーロ（Boro Golo、1953年）の一家が住んでいる。妻はスロボダンカ（Slobodanka、1959年生）、子どもは娘が三人、長女ターニャ（Tanja、1989年生）と次女ソーニャ（Sonja、1991年生）はモスタール大学に在学中、三女マヤ（Maja、1998年生）はギムナジウムに通っている。

バーチェヴィチではもう一つの一家を訪問した。ミロスラヴ・ゴーロ氏の住宅の隣に住むデヤン・スーダル（Dejan Sudar, 1939年生）氏である。

スーダル氏も内戦前には「ソーコ」に勤務し、機械工として働いていた。内戦中にはセルビア人勢力の支配地のネヴェーシニェに避難したが、1998年に妻子を避難先に残し、単身で帰還した。彼はバーチェヴィチに最初に帰還したセルビア人住民の一人であった。スーダル氏は2000年に自宅を再建、妻子を呼び寄せた。2006年から年金を受給している。家族構成は、妻ネデリカ（Nedjeljka, 1942年生）との間に二人の子どもがある。長男のスラフコ（Slavko、1966年生）は結婚し、妻子と共にデヤン氏ら両親と同居している。しかし、息子のスラフコは平日にはこの住宅にいない。彼はここから100キロ離れたセルビア人共和国のガツコ（Gacko）にある火力発電所に勤務し、週末に自宅に戻ってくる。スラフコは妻オロギツッァ（Ologica, 1969年生）との間に二人の子どもがいる。長女ヨヴァーナ（Jovana, 1994年生）はモスタール大学の薬学部に在学、長男のチェドミール（Čedmir、1997年生）はギムナジウムに通う。デヤン・スーダル氏のもう一人の子ども、つまり長女は避難中に結婚し、夫と子どもと共にネヴェーシニェに住んでいる。私が訪問時には、学校が夏休みのため、子どもを連れて実家に戻っていた。

年金を別とすると、デヤン・スーダル氏の主要な生計手段は農業である。1ヘクタールの農地にジャガイモ、トウモロコシ、ブドウを栽培している。また4ヘクタールの飼料用作物を栽培し、乳牛3頭、豚3頭、にわとり40-50羽を飼育している。耕作地の農産物の大半は農業協同組合に出荷している。その他にワインとラキヤを製造し、市場で販売している。デヤン・スーダル氏はすこぶる健康であり、毎日1リットルの自家製ワインを飲むという。

バーチェヴィチについて特筆すべきことは、内戦後に基礎自治体（オープシュティナ・モスタール）の政策によってセルビア人の土地に新しい住宅団地が造成され、新来の住民が移住したことである。彼らはすべてボスニア・ヘルツェゴヴィナのその他の地域から呼び寄せられたクロアチア人である。現在60戸の住宅が建てられ、200人を超える住民が居住する。そのためにバーチェヴィチの民族構成は大きく変わった。かつてはセルビア人が100%を占めていた集落であったが、今ではセルビア人とクロアチア人が半々になっている。

クロアチア人の移住はモスタールでのクロアチア人の人口を増やすためにクロアチア人政治指導者が導入した民族主義的な政策である。それはこの地域の民族構成を人為的に変えた。しかし、クロアチア人の移住はこの土地のセルビア人にとって必ずしも悪いことばかりではなかった。クロアチア人の到来によって、基礎自治体の執行部はこの地域のインフラストラクチュアの再建（とくに道路の舗装と電気・水道の復旧）に力を入れた。その結果、バーチェヴィチの生活条件が改善し、セルビア人の帰還も促進されたからである。2011年にはかつての公民館（Društveni dom）が再建され、それは診療所を兼ねて、医師と看護師の勤務が始まった。このような事情から、バーチェヴィチのセルビア人旧住民とクロアチア人の新住民はとくに問題なくこの土地に共住している。争いご

写真15 バーチェヴィチの農業協同組合の建物

写真16 バーチェヴィチのクロアチア人の住宅群

とが起きる気配はまったくないという。このことについて、ドゥーシャン・ゴーロ氏は次のように述べている。「彼らは私たちの土地の上に住宅を建てている。しかし、彼らの中には他の民族勢力によって元の居住地を追われてこの土地に到来した人も多い。その意味で彼らも気の毒な人びとであり、内戦の犠牲者だ。だから、私たちは彼らと仲良くやっている」[10]。

2-4 ホードビナ

ホードビナ（Hodbina）はモスタールの中心部から南へ12キロ離れた近郊農村。バーチェヴィチとはネレトヴァ川を挟んで3キロ南西の対岸地域に位置する。内戦前（1991年）の住民は1156人。うちセルビア人680人（58.2%）、ボシュニャク人324人（28.0%）、クロアチア人125人（10.8%）、ユーゴスラヴィア人20人（1.7%）、その他7人（0.6%）。ここでは、①幹線道路に近接した住宅地、②幹線道路から1キロ離れたところにある住宅、③幹線道路から3キロ離れもっとも奥地にある住宅の3つを訪問した。当地では二人の若い女性が案内者を務めてくれた。

最初に訪問した住宅は案内者の一人のイェレナ・マリッチさんの一家の住宅である。イェレナ・マリッチ（Jelena Marić、1983年生）さんは内戦前には両親と共にモスタールの市内に住んでいた。父親はリュボミール・シレゴヴィッチ（Ljubomir Siregović, 1950年生）、母親はイヴァンカ（Ivanka, 1950年生）。内戦前に両親は共にバーチェヴィチにあるアルミニウムの精錬工場「アルミニイ（Aluminij）」に勤務し、社宅として市内にアパートメントを取得した。内戦開始後、イェレナさんの一家はセルビア人勢力の支配地のネヴェーシニェに避難した。イェレナさんはこの避難先で中等学校を卒業、その後に縫製工場に就職、2004年に結婚した。夫のミロ・マリッチ（Miro Marić、1977年生）はホードビナからネヴェーシニェに避難したセルビア人難民であった。この間、1999年にイェレナさんの父親は避難先のネヴェーシニェで死亡した。

2004年に夫ミロの父親がホードビナの実家の住宅を再建したため、マリッチ夫妻は夫の両親と共にホードビナに転居した。内戦前に夫の父親はモスタールの電力会社エレクトロ・プリヴレダ（Elektro Privreda）に勤務し、市内にアパートメントを取得していた。このアパートメントは避難中にボシュニャク人が占拠していたが、2001年に取り戻すことができた。夫の父親はこの住宅を売却し、ホードビナの生家の再建資金を得た。ただし再建できたのは元の家屋の半分である。夫の父親は2008年に死亡した。現在の家族構成は、夫の母親のボーサ（Bosa、1948年生）、マリッチ夫妻、その双子の娘のニコリーナ（Nikolina、2005年生）とクリスティーナ（Kristina、2005年生）、長男のダルコ（Darko、2010年生）の6人である。ただし、イェレナさんの母親のイヴァンカは一人暮らしで不安なため、モスタールのアパートメントから頻繁にホードビナの住宅に泊まりに来ている。だから実質的には7人家族に近い。私が訪問時にもイヴァンカは来ていた。イェレナさんの母親と夫の母親は共に毎月315KM の寡婦年金を受給している。

イェレナさんの夫のミロ・マリッチはホードビナに帰還後、近隣の製材会社に就職した。しかし、2013年8月にこの会社は倒産し、25人の従業員は全員解雇された。そのため、母親が受給する年金を別とすると、マリッチ一家の主要な生計の手段は農業のみとなっている。現在、マリッチ夫妻は近隣住民の土地も借りて1ヘクタールの農地を耕作している。主要な作物は果樹（ブドウ）と野菜（パプリカとキャベツ）である。その他にジャガイモ、トウモロコシ、トマト、ニンジン、カボチャ、桃を栽培しているが、これらは自家消費用である。農業はもう少し規模を拡大したいが、機械設備がないため、この程度が精一杯であるという。また家畜として豚を3頭飼育している。その肉は食肉にしたり、燻製肉にしたりして食べている。食費の節約のため、パンも小麦粉から生地を作り、自宅で焼いている。

イェレナさんの双子の娘は初等学校に通っている。2014年の9月には3年次に進級した。初等学校は自宅から3キロ離れた場所にある。交通量の多い幹線道路を歩いて通うのは危険なので、毎日

自動車で送迎をしている。ホードビナ全体では12人のセルビア人の子どもが初等学校に通っている。初等学校はクロアチア人が多数であり、クロアチア人の教育プログラムと教科書で授業は進められている。クロアチア人の生徒もセルビア人やボシュニャク人の生徒も通常は同じ教室で勉強している。唯一、民族別に生徒が別れるのは宗教（信仰）の時間である。カトリックの時間にはセルビア人やボシュニャク人の生徒は休み時間ないし自習の時間をとる。セルビア人の信仰である正教の授業は正規の授業前（午後12時45分から授業が開始の場合）か正規の授業の後（午前7時半から授業が開始の場合）に設定されているので、クロアチア人の生徒には影響がない。授業には正教会から聖職者がやってくる。中等学校はモスタールの市内まで通学しなければならない。その場合最大の心配はバスの定期代が高い（月50KM）ことであるという。

次に訪問したのはもう一人の案内者、ミリヤーナ・パラヴェストラさんの一家である。ミリヤーナ・パラヴェストラ（Milijana Palavestra, 1991年生）さんは2014年に満23歳、私がモスタールで話を詳しく聞いた人の中ではもっとも若い世代に属する。ミリヤーナさんはホードビナから45キロ南西に離れたセルビア人共和国のリュビーニェ（Ljubinje）の出身である。彼女は2009年に結婚、夫の実家のあるホードビナに転居した。夫のゴラン（Goran、1987年生）とは中等学校の時に知り合った。どうやって知り合ったのかを聞いたところ、ゴランは当時、女の子をナンパするために友人とリュビーニェまで出かけ、そこで知り合ったと明かした。ミリヤーナ・パラヴェストラの一家の構成は、ミリヤーナさんとゴランの夫婦、夫の父親のヴァーソ（Vaso、1954年生）、母親のナーダ

写真17 野菜畑の前に立つイェレナ・マリッチさん

写真19 イェレナさんと3人の子どもたち

写真18 イェレナさんのパプリカ栽培のハウス

写真20 左からミリヤーナさん、夫のゴラン、その母親のナーダ

（Nada、1961年生）、夫の兄のセルゲイ（Sergej,1982年生）の5人である。セルゲイの下には長女のゴルダナ（Gordana、1983年生）がいるが、彼女は避難先のネヴェーシニェで結婚し、そこに住み続けている。

ミリヤーナさんの夫の父親であるヴァーソ・パラヴェストラ氏は内戦前にはモスタールの鉱山運営会社（Rudnik Mostar）に勤務し、トラックの運転手をしていた。1992年の内戦開始後にパラヴェストラ一家はネヴェーシニェに避難、ボシュニャク人が残した住宅に住んだ。1998年から破壊された自宅の再建に着手し、2004年にホードビナに帰還した。当地は2000年に電気が復旧した。水道は井戸水を引き込み、トイレは浄化槽を利用している。ヴァーソ・パラヴェストラ氏はネヴェーシニェでは定職はなく、国際機関からの人道支援物資の配給によって生活していたという。彼は2007年に病気のために仕事ができなくなり、2012年から障害年金を受給している。父親に代わって家計を支えているのは二人の息子である。長男のセルゲイはボスニア・ヘルツェゴヴィナ国軍のヴラプチッチの兵舎で運転手の仕事をしている。次男のゴランは近くの製材所で働いていた。すでに述べたミロ・マリッチと同じ職場である。そのため、製材所の倒産によってゴランも2013年に8月に職を失った。現在、就業斡旋所に求職登録をしている。ゴランは機械科の中等学校を出ていて自動車のメカニズムに強いので、自動車修理の仕事に就きたいと述べている。ゴランの妻のミリヤーナ・パラヴェストラさんはモスタール大学自然科学・数学・教育学部（Fakultet prirodoslovno-matematičkih i odgojnih

写真21 ゴランが修理再生した1957年製のドイツのトラクター

写真23 トマトを栽培するハウスの前に立つゴラン

写真22 ヴァーソ・パラヴェストラ氏の孫とイェレナさんの子どもたち

写真24 家畜のヤギ小屋の前に立つズヴェズダン・スィラン氏

znanosti Sveučilišta u Mostaru）に通う学生であり、地理学を専攻している。彼女は正規の学生ではなく、非正規の学生である。そのため、奨学金や授業料の免除を受ける資格はなく、授業料をすべて自弁しているという。

ミリヤーナさんの夫のゴランは失業中のため、当面は農業に専念している。1.5ヘクタールの農地を耕作し、自家消費用の野菜や果樹の他に販売用の作物として果樹（ブドウ、モモ、スモモ）、野菜（パプリカ、トマト）、穀物（小麦、大麦、ライ麦）を栽培している。家畜では牛を2頭、豚を7頭飼育している。興味深いのは故障品のトラクターを安値で2台購入し、ゴランが自分自身で修理して使用できるようにしたことである。一つは2010年に購入したドイツ製のトラクターであり、1957年製造で通常ならばスクラップになってもおかしくないものである。これを部品とエンジンを取り替えて使えるようにしたという。もう一つは日本の三菱製の小型トラクターであり、これは1992年の製造である。三菱製のトラクターは2014年2月に購入したばかりであり、価格は5000ユーロ、3年の分割払いで支払いをしている。ドイツ製のトラクターは穀物や牧草の畑の耕作に使用し、三菱製のトラクターは野菜畑や果樹園の耕作に使用している。パラヴェストラさんの家では自宅でワインやラキヤも製造し、販売に回している[11]。

3軒目はスイェラン一家である。彼らの住宅は幹線道路から3キロも離れている。しかもホードビナのもっとも奥地の高台にある住宅地である。でこぼこ道の山道を自動車で登り、ようやくたどり着いた。当地は内戦前に11戸の世帯があったが、帰還者は3世帯に過ぎないという。一つの理由は生活条件が悪いことである。当地は1999-2000年に電気が復旧した。しかし、水道はなく、住民は近くの川に毎日水をくみに行っている。

スイェラン一家の家族構成は、ヨーヴォ・スイェラン（Jovo Sjeran、1952年生）、その妻のスラヴォイカ（Slavojka, 1955年生）、長男のズヴェズダン（Zvjezdan, 1979年生）、次男のドラガン（Dragan、1988年生）の4人である。当日はヨーヴォの弟のネージェ・スイェラン（Nedje Sjeran、1957年生）が来ていた[12]。

内戦前にヨーヴォ・スイェラン氏は1967年から1988年まで「ソーコ」で働き、その後1992年までホードビナ近郊に立地していた花き栽培企業「ヘーポク」(HEPOK)で働いていた。妻のスラヴォイカも1985年から1992年まで「ヘーポク」で働いていた。内戦開始後の1992年にスイェラン氏の一家は南方のセルビア人勢力の支配地のガツコ（Gacko）に避難、ボシュニャク人が立ち退いた住宅に居住した。ガツコでは定職はなく、難民に供給される人道支援物資で生き延びてきた。内戦中にホードビナの住宅は略奪され、放火・破壊された。2002年にオランダの助成金を得て、住宅を再建、ホードビナに帰還した。ヨーヴォ・スイェラン氏は病気で働けなくなり、2003年から障害年金の受給資格を得た。この間に長男のズヴェズダンは1998年から2005年までガツコの火力発電所で働き、その後にホードビナに戻って製材所に勤務した。次男のドラガンも中等学校を卒業後、同じ製材所に就職した。彼らもまたミロ・マリッチの同僚であった。そのため、2013年8月の製材所の倒産によって職を失った。その後は就業斡旋所に登録しているが、たまに日雇いの仕事があるのみである。

他に仕事がないため、二人の息子はやむなく農業に専念している。ヨーヴォ・スイェラン氏は3.5ヘクタールの農地を所有しているが、トラクターがないため、手作業で耕作している。そのため、耕作しているのは1ヘクタールの農地のみである。主要な作物は果樹（ブドウ）であり、残りは自家消費用の野菜である。家畜はヤギを50頭、牛1頭、豚2頭、にわとり6羽を飼育している。

現在、一家の主要な現金収入はヨーヴォ・スイェラン氏が受給する月300KMの障害年金である。ヨーヴォ・スイェラン氏は毎月近くの診療所に通い、3ヶ月に一度はモスタールの病院で検査を受ける。毎月10-12種類の薬を購入するため、年金の半分（150KM）は薬代で消えるという。案内者のイェレナ・マリッチさんとミリヤーナ・パラヴェストラさんによれば、スイェラン氏の家族はホードビナの中ではもっとも生活が苦しい一家の一つである。

2-5 オルティイェシュ

オルティイェシュ（Oetiješ）は市内から南へ7キロ離れた近郊農村である。前述のバーチェヴィチとはネレトヴァ川をはさんで東側の対岸に位置する。幹線道路のすぐ東で交通の便がよい。内戦前（1991年）の人口は300人、うちセルビア人262人、ボシュニャク人9人、クロアチア人6人、その他23人であった。

当地の案内者はミロヴァン・カラデグリヤ氏、「モスタールへのセルビア人の帰還のための連合」の活動家の一人である。ミロヴァン・カラデグリヤ（Milovan Karadeglija, 1940年生）はサライェヴォで生まれた。オルティイェシュ出身の父親は当時、サライェヴォで旧ユーゴスラヴィア王国の役所の職員をしていたためである。母親はクロアチア人であった。父親は第二次世界大戦後にモスタールの実家に戻り、モスタール市役所の職員になった。ミロヴァン・カラデグリヤ氏は1958年にモスタールの専門学校を卒業し、住宅の壁を塗る職人になった。1965年に結婚、二人の娘をもうけた。カラデグリヤ氏は1976年にユーゴスラヴィア人民軍に民間人職員として就職し、そこでもペンキ塗りの仕事を担当した。内戦開始後、1992年から1995年の間、カラデグリヤ氏は妻および娘夫婦の家族と共に南方のセルビア人勢力の支配地であるビレチャ（Bileća）に避難した。1995年、カラデグリヤ氏の一家はネヴェーシニェに避難地を移した。この間、カラデグリヤ氏の妻は病死した。1996年にカラデグリヤ氏はビレチャで知り合ったモンテネグロ出身の女性と再婚した。これが現在の妻のドーブリッツァ（Dobrica、1940年生）である。カラデグリヤ氏は1998年に住宅の再建を開始、1999年にオルティイェシュに帰還した。当地では電気は1999年に復旧した。水道は井戸水を引いている。

ミロヴァン・カラデグリヤ氏には前妻との間にできた二人の娘、ミリヤーナ（Milijana、1965年生）とミレンカ（Milenka、1967年生）がいる。二人は共に内戦前に結婚し、実家を出ている。長女のミリヤーナは当初ネヴェーシニェで結婚し、現在はセルビア人共和国の首府のバニャ・ルーカに住む。夫は元軍人で、現在はバニャ・ルーカの民間企業に勤務し、ワゴン車で商品を運ぶ仕事をしている。孫娘のダニイェラ（Danjiela、1990年生）はバニャ・ルーカ大学に通っている。次女のミレンカは現在、オルティイェシュから南方に13キロ離れたモスタールの最南部の集落ジトミスリッチ（Žitomislići）に住んでいる。ミレンカの夫のミラン（Milan、1967年生）は内戦前に「ソーコ」で働いていたが、内戦中に失業、その後は定職がなく、現在は農業に従事している。次女夫婦には3人の子どもがいる。長女のタマラ（Tamara、1992年生）は病院の看護師として働いているが、長男のマルコ（Marko、1993年生）は中等学校を卒業後に就職がなく、次女のマリヤ（Marija、1997年生）はまだ中等学校に通っている。次女は近くに住んでいるのでよく実家を訪ねてくるという。

ミロヴァン・カラデグリヤ氏は現在、月480KM（240ユーロ）の年金を受給、妻のドーブリッツァも内戦前に働いていたため、月400KM（200ユーロ）の年金を受給している。この家には妻の妹のドラーギッツァ（Dragica、1942年生）が同居している。ドラーギッツァは姉が結婚した後にビレチャで母と同居していた。しかし、母が死亡し一人暮らしになったため、姉のドーブリッツァが当地に呼び寄せた。ドラーギッツァもまた内戦前に企業に長く勤務していたため、姉とほぼ同額の自分の年金を受給している。

カラデグリヤ氏は左足を骨折したことがあり、膝にプラスチックの人工関節を入れている。しかし、それ以外はすこぶる健康であり、歩行も通常にできて、自動車の運転も自在にこなしている。妻とその妹も高齢者に属するが、共に健康である。彼らは0.8ヘクタールの農地を耕作し、果樹（ブドウ、モモ）と野菜（トマト、カボチャ、パプリカ、トウモロコシ、ジャガイモ）を栽培している。もっとも、これらはすべて自家消費用だという。3人の家族員はそれぞれが自分の年金をもち、食材の多くを自給できている。そのため、彼らの生活には余裕が感じられる。

ミロヴァン・カラデグリヤ氏の自宅では二人の友人に話を聞くことができた。一人はモムチ

ロ・メダン（Momcilo Medan、1942年生）氏である。モムチロ・メダン氏は内戦前にモスタールの電気工事会社「エレクトロ」（Elektro）に勤務し、電気工事と配線の仕事をしていた。内戦開始後の1992年にメダン氏は最初の1年間をセルビア人勢力の支配地のネヴェーシニェで避難生活をし、1993年からはトレビニャ（Trebinja）に移動した。トレビニャに転居したのは当地の火力発電所で仕

写真25 ミロヴァン・カラデグリヤ氏と妻のドーブリッツァ

写真28 ミラン・メダン氏の長男のステファン(右端)と次男のオグニェン(左端)

写真26 再建されたミロヴァン・カラデグリヤ氏の住宅

写真29 ミラン・メダン氏所有の230m続くサクランボの畑

写真27 オルティイェシュでもっとも成功している農業者のミラン・メダン氏

写真30 ミラン・メダン氏のブドウの苗木、散水用のチューブが設置されている。

事を見つけたためである。トレビニャはオルティイェシュから南に120キロ離れたところにある。2002年にモムチロ・メダン氏はオルティイェシュの住宅を再建し、妻のボリカ（Borika、1947年生）が先に帰還した。メダン氏は引き続きトレビニャの発電所で働いていたが、2007年に年金受給資格を得て退職し、オルティイェシュに帰還した。

モムチロ・メダン氏は二人の子どもをもうけたが、次男のジョルジェは徴兵され、内戦中に19歳で戦死した。長男のダリボール（Daribor、1969年生）はトレビニャに残り、発電所で働いている。ダリボールは妻ヴェドラナ（Vedrana、1977年生）との間に3人の子どもがいる。上から長男のジョルジェ（Dorde、1999年生）、長女のマリヤ（Marija、2001年）、次男のアレクサ（Aleksa、2004年生）であり、すべてまだ初等学校に通っている。

モムチロ・メダン氏は現在、月500KM（250ユーロ）の年金を受給している。彼は0.95ヘクタールの農地を耕作し、自家消費用の野菜と果樹を栽培している。妻も内戦前に働いていたので自分の年金をもっている。この点ではモムチロ・メダン氏はミロヴァン・カラデグリヤ氏とまったく同じような生活をしている。

ミロヴァン・カラデグリヤ氏のもう一人の友人はニコラ・カラデグリヤ（Nikola Karadeglija、1946年生）である。ニコラ・カラデグリヤ氏は祖父の代からの専業農家であり、彼自身一度も企業に就職したことがない。彼は内戦開始後にセルビアのベオグラードに避難していたが、1999年に住宅を再建し帰還した。父親は内戦前に死亡、母親も避難先のベオグラードで死亡した。同氏は未婚であり、現在は一人暮らしである。ニコラ・カラデグリヤ氏は内戦前には5ヘクタールの農地を耕作するこの地域では有数の農家であったが、現在は2ヘクタールに規模を縮小している。主要な作物は果樹である。300本のブドウの木を栽培し、採れたブドウをすべて地元のワイナリーに納入している。また200本の桜の木を栽培し、サクランボを市場に出荷している。その他には野菜を栽培し、また牛、にわとり、豚を飼育している。これらは自家消費用である。

オルティイェシュでは当地のセルビア人帰還者の中でもっとも成功している農業者と面談することができた。ミラン・メダン（Milan Medan、1961年生）氏である。同氏の家族構成は父親のタナーシイェ（Tanasije、1939年生）、母親のダーニッツァ（Danica、1938年生）、妻のアディーサ（Adisa,1967年生）、長男のステファン（Stefan、1991年生）、次男のオグニェン（Ogjnjen、1994年生）、長女のヴァーニャ（Vanja、1996年生）の7人である。

ミラン・メダン氏はモスタール大学土木工学部を卒業後、1986年にモスタール市内の百貨店ラズヴィタク（Robna kuća Razvitak）に就職、内戦開始の1992年までそこで働いた。妻のアディーサも中等学校を卒業後に同じ百貨店に勤め、そこで知り合ったので職場内結婚である。内戦開始後の1992年にミラン・メダン氏は徴兵され、1996年1月までセルビア人共和国軍の兵士として従軍した。この間に両親と妻子はセルビア人勢力の支配地トレビニャに避難した。軍隊を除隊後、ミランはトレビニャの家族と合流、妻や両親と共にトレビニャの市場で野菜と果物を売る仕事をした。両親は1999年から一時帰還を繰り返し、破壊された自宅の再建を始めた。2000年にアメリカの国際NGOのアメリカ難民委員会（The American Refugee Committee）から助成金を得て、自宅を再建した。2001年の秋に両親は先にオルティイェシュに帰還し、2001年から農業を再開した。その際にはスイス政府から農業再建のための資金を得た。2004年にミラン・メダン氏も妻子と共にオルティイェシュに帰還した。

2005年にミランは父親のタナーシイェと共に野菜とブドウの出荷組合「晴天のドリナ」（Udruženju povrtara i vinogradara "Sunčana dolina"）を結成した。会員の農家は当初は18戸であったが、2014年にはそれは59戸に拡大した。前述のミロヴァン・カラデグリヤ氏やニコラ・カラデグリヤ氏もその会員である。この出荷組合はこの地区全体で170ヘクタールの果樹園と菜園をカバーしている。内訳はブドウ、サクランボ、モモ、スモモの果樹園が140ヘクタール、ハウス栽培のイチゴ園が20ヘクタール、露地栽培のイチゴ園が10ヘクタールである。この出荷組合のメンバーの果樹園と菜園

にはすべてスプリンクラーが引かれている。彼らはワインやラキヤを製造する酒造業者に果樹を供給するほか、モスタールからトレビニャに至る青果市場に果樹を出荷している。

ミラン・メダン氏の長男のステファンはモスタールのギムナジウムを卒業後にアメリカ・ノースカロライナ州にあるメソジスト大学に留学した。ボスニアからこの大学へ選ばれた5人の奨学金留学生の一人である。ステファンは大学では国際政治と外交を専攻し、2014年5月に卒業、オルティイェシュの実家に戻っている。私が訪問したときには求職中であり、外交官の仕事を探していた。父親のミランは現在、息子の就職のために懸命に知人につてを頼っていると述べた。もし2014年9月までに希望の仕事が見つからない場合にはステファンはセルビアのベオグラード大学政治学部の修士課程に進学するつもりだと語った。

ミラン・メダン氏の次男のオグニェンはモスタール大学の機械工学・情報工学部（Fakultet strojarstva i računarstva）に在学、コンピュータ・プログラマーを目指している。この学部では毎年200－300人の入学者があるが、単位の取得が難しく、情報工学科の卒業者は20人程度である。ボスニアではIT技術者は非常に不足しているので、卒業生は必ず就職できるという。長女のヴァーニャは中等学校に在学中だが、語学の才能があり、ドイツ語と英語をマスターしている。ヘルツェゴヴィナ地区で開催された英語能力のコンテストでは見事に1位を獲得した。大学でも外国語を専攻し、将来は外国語能力を生かした職業に就くことが希望であるという。

ミラン・メダン氏は3年前からモスタール空港で働き始めた。仕事は雑用で、乗客の誘導や荷物の運搬などである。当初は期間の定めのある雇用であったが、2014年9月からは期間の定めのない雇用になるという。もっとも、モスタール空港では発着の便数が少ないので仕事は週3日の勤務である。しかし、オルティイェシュの自宅からモスタール空港までは自動車で3分の近さである。そのため、農作業にはまったく影響がない。就職によって安定収入が得られるので非常に有り難いと同氏は述べる。

2-6　チャプリーナのプレビロフチ

チャプリーナ（Čapljina）はモスタールの南に隣接する基礎自治体である。内戦前（1991年）の人口は27882人、民族構成はクロアチア人が過半数を占め（14969人、53.7%）、ムスリム人（7672人、27.5%）、セルビア人（3753人、13.5%）、その他（1488人、5.3%）である。モスタールと同様に当地も近郊にセルビア人の集落がある。

私が訪問したのは中心部から南東に3キロ離れた場所にある農村、プレビロフチ（Prebilovci）である。当地はモスタールからは南に30キロ離れた場所にある。内戦前（1991年）の人口は174人、そのうち171人（98.3%）はセルビア人だった。前述のバーチェヴィチと同様にこの集落は数百年に渡り、純粋にセルビア人のみで構成される村だった。

プレビロフチは第二次世界大戦中にこの地域を支配下に置いたクロアチア人勢力がセルビア人住民を大量虐殺したことで知られている。すなわち、1941年8月にクロアチア人の武装勢力（民族主義団体「ウスタシャ」の部隊）はプレビロフチに侵攻し、手当たり次第に住民を殺害し、山中の洞穴に投げ込んだ。800人近くの犠牲者の大半は集落に残っていた女性、子ども、高齢者であった。生き残った住民は山中に逃げた男性中心に170人程度であった。同様の蛮行はヘルツェゴヴィナ地方の各地で繰り返され、4000人のセルビア人が犠牲になったといわれている。プレビロフチでは生き残った住民はその後にパルチザンの隊列に身を投じ、戦後はプレビロフチに戻って新しい家族を作り、セルビア人のコミュニティを再建した。

1992年4月に内戦が始まるとプレビロフチはセルビア人武装勢力の拠点になった。しかし、セルビア人勢力の撤退に伴ってすべての住民は集落を脱出した。その間にクロアチア人勢力によって住民の住宅は略奪され、そのあと放火されるか爆破された。プレビロフチにはセルビア正教会の聖堂があり、その地下室には第二次世界大戦中にウスタシャの蛮行の犠牲者になったセルビア人の遺骨を埋葬されていた。しかし、教会の建物は1992年にダイナマイトで爆破された。内戦後に遺骨は

拾い集められ、再建された公民館に保管されている。プレビロフチでは現在、セルビア正教会の建物の再建工事が進行中であり、完成の暁には再び遺骨を安置する予定である。

内戦前にプレビロフチには62戸の家屋があった。2014年現在で25戸の住宅が再建され、65人が常住している。さらに15軒の家族が住宅の再建を希望し、政府助成の交付を待っている。当地では2003年に電線が敷設され、電気と電話回線が復旧した。

写真31 再建中のプレビロフチのセルビア正教会

写真34 まだ建て直していない自宅の前に立つライコ・ブルート氏

写真32 プレビロフチの集落の遠景

写真35 ミラディン・エクメチッチ氏

写真33 ライコ・ブルート氏と妻のヴェラ

写真36 総勢7人のエクメチッチ一家

プレビロフチでは二軒の住宅を訪問し、話を聞くことができた。その一つはライコ・ブルート氏の住宅である。ライコ・ブルート（Rajko Bulut、1962年生）氏は内戦前にはボスニア最大のインフラ建設企業「エネルゴインヴェスト（Energoinvest）」に勤務し、金属加工の仕事をしていた。父親は内戦前に死亡した。1992年に内戦開始後、セルビア人勢力の撤退に伴ってブルート氏は近隣の人びとと共にセルビア人勢力の支配地域であるベルコヴィチ（Berkovići）に逃れた。1997年にブルート氏はリュービニェ（Ljubinje）で就職し、1999年に結婚した。ブルート氏は1999年から住宅の再建に着手した。週末にプレビロフチに戻り、少しずつ家屋を建て直した。その後2003年に助成金を獲得、住宅の建て直しを完了し、家族を呼び寄せて当地での生活を始めた。家族は妻ヴェラ（Vera、1973年生）、長男シーニシャ（Siniša、2000年生）、長女ミーリツァ（Milica、2004年生）の4人家族である。ブルート氏は日本の町内会に相当する当地の地域コミュニティ（Mesna Zajednica）の代表を務めている。

ライコ・ブルート氏は2007年に人員整理のために勤め先から解雇され、失業した。その後は農業を専業とする。ブルート氏は5ヘクタールの農地を耕作し、野菜（キャベツ、カボチャ、ジャガイモ、パプリカ、タマネギ、甜菜）と果樹（カリン、イチジク、スモモ）を栽培している。これらの作物はチャプリーナの青果市場に出荷し、また一部を自分の店で販売し現金収入を得ている。組織的な販売網があれば生産と売り上げはもっと増えると述べている。

次に訪問したのはミラディン・エクメチッチ氏の一家である。ミラディン・エクメチッチ（Miladin Ekmečić、1955年生）の父親は第二次世界大戦中の虐殺を逃れ、生き残った住民の一人であった。そのため、近くの公民館に掲げられている当時の住民の集合写真には父親の姿が含まれている。父親の妻子はウスタシャによって殺害された。父親は戦後に再婚し、ミラディン氏が生まれた。ミラディン・エクメチッチ氏は内戦前には自動車整備工として16年間働いた。エクメチッチ氏は35歳になった1990年に結婚、1992年に内戦が始まると妻子と共にビレツァ（Bileća）に避難した。その後にエクメチッチ氏はセルビア人共和国軍に徴兵され、内戦終結まで従軍した。1996年の除隊後にビレツァに戻り、2002年に妻子と共にプレビロフチに帰還した。アメリカ政府の出資する助成金を獲得し、郷里の住宅を再建できたためである。

エクメチッチ氏の一家は7人家族である。妻ソイカ（Sojka、1966年生）は内戦前にモスタールの縫製工場で働いていたが、現在は無職である。夫妻には5人の子どもがいる。長男ボヤン（Bojan、1991年生）、モスタール大学で情報工学を学んでいるが、スポーツが得意であり、プロのバスケットボール選手をめざしている。長女ボヤナ（Bojana、1994年生）は中等学校を卒業したが、まだ就職先が決まっていない。次女ブランカ（Branka、1999年生）中等学校に通い、三女ビリャーナ(Biljana、2000年)は初等学校に通っている。帰還後に生まれた四女のボジャーナ（Božana、2007年生）は私が訪問時に未就学であったが、2014年9月からは初等学校に入学する。

プレビロフチに帰還後、エクメチッチ氏は農業で生計を立ててきた。この地域は季候がよく、土地は肥えている。水もわき水が豊富にある。しかも耕作されていない土地はいくらでもある。それゆえ、農業の条件はそろっている。しかし、エクメチッチ氏の長年の悩みは機械設備、とくにトラクターがないことであった。そのため、すべての作業を手作業でやらなければならなかった。妻や子どもたちも農作業を手伝ったが、耕作できる規模に大きな限界があった。エクメチッチ氏はセルビア人共和国政府に2回手紙を書き、窮状を訴えて援助を求めた。しかし、一度も返事はなかった。その他にもいろいろなところに助成を求めたが、成功しなかった。エクメチッチ氏はトラクターの入手をほとんどあきらめていたが、僥倖が訪れた。2010年に隣国セルビアの人道主義援助団体「セルビア人のためのセルビア人」（Srbi za Srbe）がプレビロフチに取材に訪れた。当地のセルビア人の生活を紹介するためである。その後にエクメチッチ一家の暮らしぶりと窮状を紹介する記事がこの団体のホームページに掲載された。このことがきっかけで全世界のセルビア人からこの団体に

寄付が寄せられた。この寄付が一定額に達したため「セルビア人のためのセルビア人」はトラクターを購入し、2011年1月にエクメチッチしに寄贈した。価格は9814ユーロであった。

トラクターを入手したエクメチッチ氏は耕作規模を拡大し、収入を増やすことができた。5人の子どもたちは年々成長し、今ではすべての子どもが農作業を手伝うようになっている。エクメチッチ氏が所有する農地は1.5ヘクタールであるが、この集落を去った住民の土地を借りて耕作地を徐々に拡大している。作物はライコ・ブルート氏と同様に野菜と果樹である。しかし、エクメチッチ氏の一家では飼料用の牧草地も耕作し、４頭の牛を飼育している。1台のトラクターによって一家の生活水準は大きく向上した。まだ就学中の子どもを多く抱えているので、生活に余裕はないとエクメチッチ氏は述べる[13]。しかし、エクメチッチ氏は今後お金を貯めてその他の設備を導入し、耕作規模と家畜の飼育数を拡大する計画を持っている。果樹や野菜はボスニアの各地から青果業者が買い付けに来る。最大の問題は野菜や果樹の市場価格が不安定であり、採算割れの価格になることもあることである。それでも一家の将来には希望があり、エクメチッチ氏とその家族の表情は明るかった。

プレビロフチについてもう一つ非常に印象的だったのは、ブルート氏やエクメチッチ氏の一家以外にも帰還した世帯に子どもが生まれていることである。2014年7月の時点で集落の中には10人超の未就学の子どもがいるという。ただし集落には内戦前のように初等学校がないので、3キロ離れたチャプリーナの市内までバスで通学する必要がある。

３　ドゥルヴァールとその周辺部におけるセルビア人の帰還と残留

3-1　町の概況

ドゥルヴァール（Drvar）はボスニア・ヘルツェゴヴィナの最西部に位置し、クロアチア共和国との国境沿いにある基礎自治体である。標高は海抜700から1200メートル、豊かな森林をもつ山間の町である。ドゥルヴァールの名は現地語で木材を意味するドゥルヴォ（drvo）に由来する。気候は雨が少なく、冬は非常に寒く、夏は涼しい。当地は内戦前には第二次世界大戦後のユーゴスラヴィアの指導者のチトーにちなんで「ティトヴ・ドゥルヴァール」（Titov Drvar）と呼ばれたが、内戦後にはチトーの名は取り除かれた[14]。

この町は行政的にはボスニア連邦のヘルツェグ･ボスナ県（Hercegbosanska županija）、通称「カントン10」（Kanton deset、10番目の県という意味）に属する。「カントン10」は人口の8割近くをクロアチア人が占め、県レベルではクロアチア人が政治的に支配している。ところが、北部の3つの基礎自治体（ドゥルヴァール、ボサンスコ・グラホヴォ、グラモーチ）ではセルビア人が人口の多数派を占める。このうちドゥルヴァールでは内戦前（1991年）の人口は17126人、民族構成はセルビア人16608人（97.0%）、クロアチア人33人（0.2%）、ボシュニャク人33人（0.2%）、ユーゴスラヴィア人384人（2.2%）、その他68人（0.4%）であった。

内戦末期までドゥルヴァールはセルビア人勢力、すなわちセルビア人共和国軍（Vojska Republike Srpske ; VRS）の支配地域に含まれ、戦火を免れていた。ここはセルビア人が人口の圧倒的多数を占める地域であり、内戦開始後に町から避難したのは少数派のクロアチア人とボシュニャク人であった。ところが、内戦末期に情勢は大きく変化した。

1995年9月に隣国のクロアチア共和国軍（Hrvatska Vojska ; HV）の部隊は国境を越え、ボスニア北西部に攻め込んだ。この作戦にはボスニアのクロアチア人武力勢力（クロアチア防衛評議会Hrvatsko vijeće obrane ; HVO）も加わり、大軍が押し寄せた。これに対し、セルビア人共和国軍の防衛網は手薄であり、彼らは戦闘を避けて撤退した 。セルビア人勢力の撤退に伴って、この地域のすべての住民は危険を避けるため、セルビア人勢力の支配地域に一斉に避難した。そのため、クロアチア人勢力が到来したときにはこの地域はほぼ無人の状態であった。この結果、ボスニア北

西部の3地域（ドゥルヴァール、ボサンスコ・グラホヴォ、グラモーチ）はクロアチア人勢力が易々と占領した。

このあとドゥルヴァールはクロアチア人の町に変わった。1997年春にその人口はクロアチア人武装勢力の部隊とその家族が約2500人、中部ボスニアの各地の居住地を追われたクロアチア人が約6000人であった。彼らは立ち去ったセルビア人住民の住宅を占拠し、生活をしていた。しかし、内戦が終結すると、この地域を去ったセルビア人の中には帰還しようとする者が現れた。クロアチア人勢力は当初、故彼らの帰還を徹底的に妨害した。たとえば、町にはクロアチア人が占拠していない住宅も残されていたが、セルビア住民が戻ってきそうな気配になると、クロアチア人勢力はこの住宅を略奪し、打ち壊したり、放火したりした。1998年4月には内戦終結後のボスニアで最大規模の騒乱が発生し、多くのセルビア人の住宅や建物、施設が放火された。ドゥルヴァールでは内戦中に戦火により損傷を受けた住宅よりも内戦後にセルビア人の帰還を妨害するために放火されたり、破壊されたりした住宅が圧倒的に多い。これは内戦前にセルビア人が多数を占め、内戦末期にクロアチア人勢力が占領したボスニア北西部の町に共通する特徴である。

その後、2000年代に入り、セルビア人の帰還のプロセスは本格化した。これには2つの事情がその背景にある。1つはドゥルヴァールに駐留していたクロアチア人武装勢力が立ち去ったことである。もう一つはボスニアに駐在する国際機関、とくに上級代表事務所の指導によってクロアチア人が占拠していた住宅の返還が進んだことである。セルビア人の住宅を占拠していたクロアチア人は法律に従って強制退去を命じられ、そのほとんどはこの町を立ち去った。ドゥルヴァールの基礎自治体の担当者によれば、最盛時に1万人程度が居住していたクロアチア人は2012年には600人から800人程度に減少しているとのことである。

ドゥルヴァールはボスニアの中では内戦後にマイノリティ住民の帰還者の数がもっとも多かった町として知られている。それでも帰還しなかった者も非常に多い。2013年10月の人口調査の結果によればドゥルヴァールの人口は7506人であり、これは内戦前の人口の44%に相当する[15]。

私は2012年7月に基礎自治体の庁舎を訪問し、行政担当者に面会し、町の概況を聞いた。基礎自治体の当時の首長はアンカ・パーパク・ドディグ（Anka Papak-Dodig、1955年生）氏、女性の政治リーダである[16]。パーパク・ドディグ氏は内戦前には地元の電気機器を製造する企業ウニス（Unis）で経理の仕事をしていた。1995年9月にクロアチア人武装勢力の侵攻に伴い、セルビア人勢力の拠点であるバニャ・ルーカ（Banja Luka）に避難し、その後シャーマッツ（Šamac）に転居した。同氏は2000年に町に帰還後、政治活動を開始した。2004年の選挙でパーパク・ドディグ氏は首長に選ばれ、2008年に再選を果たした。内戦後のボスニアで再選された女性首長は彼女だけである。

2004年に首長に就任して以来、パーパク・ドディグ氏がもっとも力を注いできた事業は電気、上下水道道、道路の補修、公共施設の建設などのインフラストラクチュアの再建であった。当初は市街地に関しても電気や上下水道が使用できない地域が半分くらいあった。街灯もなく、夜は暗闇であった。その後にインフラストラクチュアの再建はかなり進み、2010年に基礎自治体の区域ではほぼ電気が復旧した。まだ電気が復旧していないところもあるが、それは帰還者がいない場所である。しかし、郊外集落への道路の舗装や下水道の復旧はまだ終わっていない。

難民の帰還については、ボスニア・ヘルツェゴヴィナで帰還者の数がもっとも多いことを誇りに思うが、大きな問題は失業問題であるとパーパク・ドディグ氏は述べる。同氏によれば、2009年に8000人程度と見積もられる人口のうち、安定した雇用についている者は400人程度である。最大の原因は市内に雇用の場がないことである。内戦前に当地には林業・製材業、製紙業、電機、機械の企業があり、ドゥルヴァールはボスニアの工業都市の1つだった。しかし、内戦後に社会有企業は私有化され、その後に倒産した。その結果、雇用が大量に喪失した。パーパク・ドディグ氏によれば、当地で現在稼働している民間企業は製材業のフィンインヴェスト（Fininvest）のみである。こ

こでは約300人のセルビア人帰還者が働いている[17]。その他の就業の場は零細規模の製材・木材加工所と商店や飲食店くらいである。公共セクターでは、基礎自治体に65人、簡易病院の機能を持つ保健センター（Dom Zdravlje）に20人、発電所に5人のセルビア人帰還者が働いているが、警察署、郵便局、職業紹介所では職員はもっぱらクロアチア人で占められている。

この町では働く場が少ないことは町の中心部を歩くとよく実感できる。バスターミナルから幹線道路に伸びる1.5キロメートルほどの道路沿いがドゥルヴァールの目抜き通りであり、「チトー通り」と呼ばれる。しかし、通りの店には閉鎖した店が多く、中には内部が荒れ果てたままになった店舗もある。まさに「シャッター通り」の観がある。通りの裏側には操業を停止した製紙工場があり、現在は製材工場の材木置き場になっている。唯一のホテルであり、私の宿泊先の「ホテル・ドゥルヴァール」の裏側には放火された百貨店の建物の残骸がまったく手つかずの状態で放置されている。試みにチトー通りで営業している店舗を数えたところ、次のような結果になった。ホテルの中にあるレストランや美容室を別にすると、飲食店4、カフェ9、コンビニエンスストア3、果物屋2、青空市場1（野菜や果物、衣服・雑貨品を販売する10件程度のスタンドがある）、精肉店2、スポーツくじ販売店4、洋服屋2、花屋3、理髪店2、貸金業者（マイクロクレジットの取扱業者）2、銀行の営業所2、新聞スタンド1、食料品店2、雑貨店4であった。映画館や遊技場はない。娯楽施設といえば、ホテルやカフェの中にあるゲーム機を備えた場所くらいである。

3-2　都市部の帰還者世帯

2012年7月にドゥルヴァールの基礎自治体首長のアンカ・パーパク・ドディグ氏の紹介により、都市部に居住する帰還者の中で「もっとも困難な生活条件の下にある帰還者世帯」と「比較的恵まれた生活条件の下にある帰還者世帯」を訪問した。

もっとも困難な生活条件の下にある帰還者世帯の代表として役場から紹介されたのはガイノヴィッチ（Gajnović）一家である。インタビューに応じてくれたのはミキツッァ・ガイノヴィッチ（Mikica Gajnović, 1960年生）夫人。家族構成は夫マリンコ（Marinko, 1952年生）、長男ヴラディミール（Vladimir, 1978年生）、次男スルジャン（Srđan, 1983年生）の4人家族。内戦前、ミキッツァさんはドゥルヴァールの電機企業「ウニス」に勤め、秘書の仕事をしていた。首長のパーパク・ドディグ氏が勤めていた会社であり、二人は職場の同僚であった。夫のマリンコは製材企業グルメッツ（Grmeč）に勤め、電気技師をしていた。1995年9月にクロアチア人武装勢力の侵攻を前にガイノヴィッチ一家はセルビア共和国ヴォイヴォディナ自治州のノヴィ・サドに避難した。1999年にドゥルヴァールに帰還、ガイノヴィッチ一家はどこからも援助や助成を受けず、独力で自宅を立て直し、

写真37 当時のドゥルヴァール首長のアンカ・パーパク・ドディグ氏

写真38 人通りもなく閑散としたドゥルヴァールの中心部の「チトー通り」

住めるようにした。夫の母はセルビアの避難先に残ったが、2005年に死亡した。

ガイノヴィッチ一家では全員が定職をもっていない。夫妻はドゥルヴァールから避難した際に職を失い、帰還後も再就職できなかった。長男のヴラディミールは軽度の知的障害者であり、就業先がない。次男のスルジャンはセルビアのベオグラードで電気科の中等学校を卒業したが、まだ就職先がない。夫のマリンコは内戦後に内臓疾患になり、4回手術を受けた。そのため力仕事ができなくなった。現在一家の生計の手段は農業である。自家消費用の野菜を作るほかに、23頭の羊と4頭の乳牛を飼育している。一家は毎年羊毛と何頭かの羊を販売する。乳牛については、ミキッツァさんは町の市場で自家製のチーズと牛乳を販売している。これが日々の主要な現金収入である。このほかに夫のマリンコは内戦時に従軍したため、毎月40KMの手当を受給している。自宅に水道はなく、100メートル先の井戸に水をくみに行っている。このように生活は大変苦しいが、セルビアに避難していたときの生活に比べればずっとましだとミキッツァさんは述べている。

比較的恵まれた生活条件の下にある帰還者世帯の例として紹介されたのはボスニッチ・ノヴァコヴィッチ（Bosnić-Novaković）一家である。質問に答えてくれたのは夫人のミリヤーナ（Milijana、1979年生）さん。彼女は夫のニコラ・ボスニッチ（Nikola Bosnić、1977年生）と自分の母親のミルカ・ノヴァコヴィチ（Milka Novaković, 1948年生）との3人暮らし。ミリヤーナさんは1995年にドゥルヴァールの中等学校の森林科を卒業した。その後間もなく、クロアチア人勢力の進攻に伴って母

写真39 ドゥルヴァールの役場

写真41 ミリヤーナ・ボスニッチ・ノヴァコヴィッチさん

写真40 自宅の前に立つミキツッァ・ガイノヴィッチさん

写真42 きれいに再建されたミリヤーナさんの住宅

親と共にセルビア共和国ヴォイヴォディナ自治州のインジヤ（Inđija）にある親戚の家に避難した。2001年にドゥルヴァールに帰還、当初は母と二人で別の家に間借りをしていた。2003年にミリヤーナさんは前首長の推薦によって公営の営林企業「シュマーリヤ・ドゥルヴァール（Šumarija Drvar）」に就職し、技術者の仕事を得た。その後2005年に国際的な人道支援団体「チャーチ・ワールド・サービス（Church World Service: CWS）」の援助によって実家の住宅を再建することができた。2008年にニコラ・ボスニッチ氏と結婚した。夫のニコラは土木工事を請け負う自営業を営んでいる。ミリヤーナさんの父親は内戦前の1989年に死亡、それ以来彼女の母親は寡婦年金を受給している。ミリヤーナさんは現在の生活について、こう述べた。「現在母親、自分、夫のそれぞれが収入を持ち、全体として十分な水準の生活ができている。欲を言えばきりがないので、十分に満足している。ドゥルヴァールの住民の中では数少ない幸福な人間の一人だと思っている」。

3-3 郊外の帰還者世帯

ドゥルヴァールでは郊外の状況についても知ることができた。訪問先を紹介してもらったのが、地元の非政府組織「難民帰還サービス（Refugee Return Service）」である。最近この団体は「地域発展サービス（Regionalni Razvojni Servis）」に名称を変更した。略称は同じでRRSである。名称を変更した理由は難民の帰還プロセスが終了し、

写真43 ドゥルヴァールの非政府組織である難民帰還サービス（RRS）でプロジェクト・マネージャーを務めるネボイシャ・ヨヴィチッチ氏

写真45 グルーボルスキー・ナースロン一人暮らしの老婦人、ドラヤ・グラホヴァッツさん

写真44 グルーボルスキー・ナースロンの草むらの中に放置された破壊された住宅

写真46 クラーリの住民ダヴィド・クラーリ氏とその妻ペルサ

この団体は地域住民の生活条件の改善を主要な仕事にすることになったためである。

2014年7月にRRSの常勤職員は5人。2012年と2014年の訪問時に私が話を聞いたのがプロジェクト･マネージャーを務めるネボイシャ･ヨヴィチッチ（Nebojša Jovičić, 1969年生）である。同氏はバニャ・ルーカ大学経済学部に在学中に内戦勃発したため、セルビア人共和国軍に徴兵され、1992年から1996年まで従軍した。ヨヴィチッチ氏は1998年4月にドゥルヴァールに帰還したが、自宅は放火されていた。同氏によれば、ドゥルヴァールでは内戦終結後の1995年12月から1999年末までに約3000件の住宅がクロアチア人勢力によって略奪され放火されたという。1998年5月にRRSは活動を開始したが、ヨヴィチッチ氏は当初からスタッフに加わった。当時のドゥルヴァールにとって最大の課題は帰還を希望する住民への支援と破壊された住宅の再建であった。RRSは外国の援助計画を現地で執行し､資金の交付者（ドナー）と援助を受ける住民の仲介する役割を担った。

2012年7月に最初に訪ねたのはグルーボルスキー・ナースロン（Gruborski Naslon）という名の帰還者がきわめて少ない集落である。サライェヴォの非政府組織「ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける持続的帰還と統合のための連合」の調査によると、2012年の時点で帰還者世帯は16、帰還住民数は50人であった。当地への案内者はミラディン・ローディッチ（Miladin Rodic,1974年生）氏。RRSの非常勤職員である。内戦前に父親は工場の管理者、母親は病院で事務職をしていたが、現在両親は年金生活をしている。ローディッチ氏は内戦が終わってからセルビア人共和国軍に志願し、数年間軍隊生活をした。除隊後にドゥルヴァールに戻ってきたが、定職に就くことはできなかった。まだ独身であり、両親と同居し、ときおりRRSの仕事を手伝っている。

グルーボルスキー・ナースロンでは草むらの中に破壊され放置された住宅の跡が点在する。しかし、住人がいるような住宅もあるが、日中はすべて外出しているようだった。その中で一人の老女に出会った。ドラヤ・グラホヴァッツ（Draja Grahovac, 1928）さんである。内戦勃発後に彼女はボシュニャク人の夫と共にボサンスキー・ペトローヴァツ、サンスキー・モスト、サーマッツと避難所を移し、1998年3月に当地に帰還した。その夫は帰還後に死亡し、現在は毎月250KMの寡婦年金が唯一の収入である。1957年生の一人娘は東ドゥルヴァールに住み、清掃作業に従事している。娘は毎週様子を見に来てくれるという。2年後の2014年7月に訪ねたときにはドラヤ・グラホヴァッツさんはこの住宅にはいなかった。彼女の居場所や生死は不明である。

次に訪ねたのはクラーリ（Kralji）という名の集落である。当地はEUの支援によって住宅が再建され、帰還者が比較的多い集落だといわれる。50人程度の帰還者が住む。訪問したのはクラーリ一家である。その家族構成はダヴィド・クラーリ（David Kralj,1938年生）、妻ペルサ（Persa,1942年生）、息子のヴィエコスラフ（Vjekoslav, 1973年生）の3人である。クラーリ夫妻にはもう一人、娘（Vesna,1966年生）がいるが、避難先のセルビアで結婚し、ベオグラードに住んでいる。ダヴィド・クラーリ氏は内戦前にドゥルヴァールの製紙工場に勤務、内戦中はセルビアに避難した。2000年に帰還し、EUの助成によって住宅を再建した。彼は現在、月300KM の年金を受給している。農業は自家用の野菜を作るほか、170頭の羊とヤギを飼育する。家畜は育つと少しずつ売却し、年間150頭前後売却する。息子のヴィエコスラヴは独身、これまで一度も定職に就いたことがなく、父親の農作業を手伝っている。クラーリ夫妻の心配の種は息子のヴィエコスラヴに結婚相手が見つからないことである。このような農村には若い女の子は来ないという。私が訪問したときには隣人の少年ドラガン・ヴツェリヤ（Dragan Vucelja, 1996年生）が遊びに来ていた。彼は8人兄弟の末子であり、この集落で最年少の住人である。彼は毎日16キロ離れたドゥルヴァールの中等学校へバスで通う。ドラガンによれば、この集落の最高齢は103歳の女性だという。

3-4　太陽光発電パネルを導入した集落

ボスニアには今なお電気が復旧していない地

域が多く残されている。RRS（地域発展サービス）によれば、ボスニア連邦の近隣の2つの県、カントン１（Unsko-sanski Kanton）とカントン10（Livanjski Kanton、 別 名Hercegbosanska županija）だけでも約300世帯が電気のない生活をしている。これらの住民が住む集落は僻地にあり、財政難のために電力設備の敷設が先送りにされてきた。そのため、定住する帰還者は少なく、そのために電

写真47 電気が復旧していないヴェリキ・オーチイェヴァ住民ドラガン・ローディッチ氏の住宅と設置された太陽光発電パネル

写真50 照明用のろうそくを持ち出して電気のない生活の説明をしたミロラド・ローディッチ氏

写真48 太陽光発電パネルの前に立つドラガン・ローディッチ氏の母親のミラ

写真51 ゾーラン・ローディッチ氏の住宅に設置された3KWの太陽光発電パネル

写真49 いつも集って語らう集落の近隣住民

写真52 豚小屋の前に立つゾーラン・ローディッチ氏

力の復旧が先送りにされるという悪循環のプロセスがあった。この状況を打開するため、2013年9月にRRSは近隣の基礎自治体と協力して興味深い試行プロジェクトを開始した。住民の住宅に太陽光発電パネルを設置し、電力を供給するというものである。電線を敷設する場合に比べて3分の１近くにコストを減らせるとRRSは述べる。各住宅への設置費用は国連開発計画（United Nations Development Programme: UNDP）と基礎自治体が半分ずつ負担する。2014年7月の時点で21戸の住宅に太陽光発電パネルが設置されている。今後少しずつ設置を増やし、2014年末には40戸の住宅に設置する予定だという。

2014年7月にRRSの紹介により、試行プロジェクトの対象になった集落の一つを訪問した。ヴェリキ・オーチイェヴァ（Veliki Očijeva）という集落である[18]。ドゥルヴァールの中心地から北東に15キロ離れ、幹線道路の横に走る舗装されていない砂利道を1キロ入ったところにある。この地区は内戦終了後も長らく電気が復旧していない。住民は今も夜はろうそくで灯りを採る生活をしている。テレビや冷蔵庫、電気洗濯機は使用できない。家電製品はラジオのみである。なぜ発電機を使わないのかと聞いたところ、燃料費が高いことが理由だという。確かにボスニアではガソリンは1リットル2.35KM（164円）であり、日本と大差ない価格である。それは彼らの所得水準からみて相当に高額である。1日発電機を使用すると最低10KMのガソリン代がかかる。ろうそくは夜の時間が長い冬期には多く消費するが、それでもろうそく代は1年間に約300KMで済み、これはガソリン使用の場合10分の1以下の費用だという。

このような不便きわまる集落であるが30世帯の帰還者がいる。そのうち、25世帯が常住しているという。水道は井戸水を利用。近くにはまったく商店がない。3キロ離れたマルチン・ブロードという町に商店と診療所があるが診察は週に1回しかない。しかし、住民は通常、ドゥルヴァールの市内に買い物に出かけている。医療も規模の大きいドゥルヴァールの病院で受けている。

この集落で太陽光発電パネルを最初に設置したのがドラガン・ローディッチ（Dragan Rodić、1966年生）氏である。家族構成は父親のブランコ（Branko、1939年生）、母親のミラ（Mira、1945年生）の3人。妹が一人いるが結婚し、セルビア人共和国のプリイェドールに住んでいる。ドラガン・ローディッチ氏は未婚である。

内戦前にドラガン・ローディッチ氏はドルヴァールの製材企業で働いていた。父親のブランコも同じ企業に勤めていた。内戦末期の1995年8月、セルビア人勢力の撤退に伴って、一家はセルビア人勢力の支配地であるボサンスキ・シャーマッツ（Bosanski Šamac）に避難した。ドラガン・ローディッチ氏は日雇いで様々な仕事に従事、家計を支えてきた。2005年からは父親はセルビア人共和国から年金を受給する資格を得た。2009年にローディッチ氏の一家はこの集落に帰還した。ドラガン・ローディッチの両親は老後を故郷で過ごすことを強く望んだ。ローディッチ氏はこの両親の願いをかなえるため、帰還を決意した。ローディッチ氏は住宅を自力で建て直した。助成金は得ていない。一応住めるようにしたが、完全に再建できていない。現在の生計の手段は父親の年金と農業である。農業は牧畜が中心であり、羊を150頭、にわとりを11羽、牛を2頭、豚を2頭飼育している。1ヘクタールの農地を耕作し、自家用の野菜や果樹を作るほか、飼料用の牧草を栽培している

ドラガン・ローディッチ氏の住宅に設置された太陽光発電のパネルの発電能力は1.5キロワットである。照明や冷蔵庫の使用はできるが、電気洗濯機を回すにはパワーが足りない。太陽光の発電パネルの一部は温水装置になっていて、摂氏60度の温水を自宅に供給している。

まだ太陽光発電パネルを設置していない隣近所の人びとにも話を聞くことができた。ナーダ・ローディッチ（Nada Rodić、1950年生）さんは夫のスロボダン（Slobodan、1945年生）と二人暮らし。この一家も1995年8月にボサンスキ・シャーマッツ（Bosanski Šamac）に避難、2002年の当地に帰還した。屋根の修理に助成金を得たが、その他は自力で修復した。ローディッチ夫妻にはゾーラ（Zora、1969年生）とイェレナ（Jelena、1972年生）の二人の娘がいるが、いずれも結婚し、それぞれ

二人の子どもと共にドゥルヴァールに住む。ゾーラの夫はドゥルヴァールの森林監督署で測樹（木の大きさを測る仕事）をしている。イェレナの夫は水道施工会社で配管業の仕事をしている。

同じく隣人でミロラド・ローディッチ（Milorad Rodić、1954年生）氏も先述のドラガン・ローディッチと同じような境遇にある。同氏も未婚であり、母親のミホリカ（Miholika、1932年生）と二人暮らし。ミロラド・ローディッチ氏は内戦前、クロアチアのドーニィ・ラパッツ（Donji Lapac）の土木・建設会社に勤め、クレーン車を運転する仕事に従事した。職場は別の共和国であったが、オーチイェヴァからは30キロ西にある町である。車で走れば30分程度の時間で通勤できた。父親のペータルは内戦前にドゥルヴァールの製紙工場で働いていた。彼らの一家も内戦末期の1995年8月、クロアチア人勢力の到来の前にボサンスキ・シャーマッツに避難した。

ミロラド・ローディッチ氏はヴェリキ・オーチイェヴァに1999年に帰還、もっとも早く帰還した5世帯の1つであった。そのため、助成金を得て住宅を再建できた。帰還後は父親の年金収入と農業で生計を立ててきたが、2013年に父親は死亡した。現在母親が月額300KMの寡婦年金を得ている。ミロラド・ローディッチ氏は10ヘクタールの土地を所有するが、機械がないため、耕作しているのは1ヘクタール程度。自家消費用の野菜と果樹を作るほか、ヤギを10頭、ニワトリを10羽飼育している。

少し離れた場所に毎時3キロワットの発電量の太陽光発電パネルを設置した住宅があるというので訪問した。ゾーラン・ローディッチ（Zoran Rodić、1957年生）の住宅である。この発電量であれば、電気洗濯機も利用できるという。ゾーラン・ローディッチ氏は.未婚。母親のスタナ（Stana、1933年生）と父親の弟タディヤ（Tadija、1934年生）と3人暮らし。同氏は内戦前にクロアチアの港湾都市リイェーカ（Rijeka）の企業で運転手として働いていた。港に水揚げされた魚を市場に運搬することが仕事であった。彼はリイェーカにアパートメントを取得し、オーチイェヴァの実家には毎月一回帰るだけであった。彼の一家も1995年8月にボサンスキ・シャーマッツに避難、2005年にヴェリキ・オーチイェヴァに帰還した。この間にリイェーカのアパートメントはプリイェドールのクロアチア人が所有するアパートメントと交換した。このアパートメントは現在も所有しているが、めったに利用しない。なぜプリイェドールのアパートメントと交換したのかと尋ねたところ、このことについては複雑な事情があるため、他人には語りたくないと同氏は述べた。母親と父親の弟は年金収入があり、一家はきれいに再建された住宅に住んでいる。昼間に見る限りでは電気が来ていなかったとはとても想像できない立派な住宅である。ゾーラン・ローディッチ氏は現在、自家消費用の野菜と果樹を栽培するほか、ヤギ5頭、ヒツジ2頭、ニワトリ10羽、豚1頭を飼育している。

ところで、なぜこの集落でドラガン・ローディッチ氏とゾーラン・ローディッチ氏の住宅に太陽光発電パネルが設置されたのか。その理由について住民に尋ねたところ、彼らの世帯が3人以上の世帯員を持っているからだと住民は答えた。しかし、後でRRSのネボイシャ・ヨヴィチッチ氏に確認したところでは、そのような基準はないと述べた。実はこの計画を集落の住民に持ちかけたときには住民は太陽光発電パネルについて十分な知識がなかった。だから積極的にパネルの設置を希望する者はいなかった。半信半疑ながらも設置に同意したのがこの二人だったというのが真の事情である。しかし、その効果を知った今ではすべての住民が太陽光発電パネルの設置を待ち望んでいる。

ところで、先述のクラーリ地区に比べて、ヴェリキ・オーチイェヴァの住民は電気がない点でずっと不便な生活条件の下での生活を強いられている。しかし、2年前に比べクラーリ地区の住民の表情は暗かった。むしろ、ヴェリキ・オーチイェヴァの住民の表情の方がずっと明るかった。これは非常に印象的なことだった。私はこの点を不思議に思い、RRSのネボイシャ・ヨヴィチッチ氏に何か理由が考えられるかと尋ねたところ、次のような解釈を示した。すなわち、クラーリ地区では住民は将来に明るい展望を持たないが、ヴェリキ・オーチイェヴァでは少し待てば太陽光発電パネルが設置され、近い将来に生活が便利になると

いう希望を住民が持っている。その差が住民の表情に出ているのだろうと考えられる。このようにヨヴィチッチ氏は述べた。人が生きていくためには将来に対する希望が必要であることを改めて感じさせられる光景であったように思う。

4　マイノリティ帰還者の残留と世代的な再生産の条件

マイノリティ帰還者はどのような条件の下で元の居住地に残留しているのか。彼らの残留を支える要因は何か。調査を通して私が考えるに至った事柄を記し、本稿のまとめとしたい。

まず基本的な要因として二つの事柄がある。第1に生命と財産の安全が保障され、住民が安心して暮らせることである。このことは当たり前のことだが、内戦終結後の数年間は決して当然のことではなかった。マイノリティ住民が元の居住地に戻ったときにマジョリティ勢力の側から暴力や脅迫・嫌がらせを受けることが各地で頻発していたからである。モスタールやドゥルヴァールでも内戦終結直後の1990年代後半にはマジョリティ勢力のクロアチア人がセルビア人の帰還を妨害した。帰還者の住宅への放火や殺人事件も起こった。現在、両地域の治安は完全に回復している。民族憎悪を動機とした事件はまったく聞かない。公安当局は公共の秩序の維持に尽力し、住民は生命や財産に危険を感ぜず、安心して暮らせるようになっている。

第2は生活基盤の再建である。これはさらに二つに分けられる。一つは住居とインフラストラクチュアの再建である。ボスニア内戦では民族浄化、すなわちマイノリティ住民の追い出しは必ずといってよいほど彼らの財産の略奪と住宅の破壊、ならびにその居住地域のインフラストラクチュアの破壊を伴った。追い出された住民が戻ってきても生活ができないようにしておき、彼らの帰還の意欲を挫くためである。住宅がなければ持続的な残留は不可能である。それゆえ、帰還したマイノリティ住民はまず住宅の再建に着手し、次いで電力や通信、水道、道路などインフラストラクチュアの復旧を待った[19]。

もう一つは生計の手段である。これは帰還者が定住するためには不可欠の条件である。たとえ住宅を再建できたとしても、そこで生活が成り立たなければ住み続けることができない。それゆえ、元の居住地に残留するマイノリティ住民は何らかの形で生計の手段をもっている。一般的にはそれは高齢者の場合には年金であり、勤労世代の場合には何らかの職業である。もっとも、職業といっても、調査事例が示すように、マイノリティ住民の中では常勤の被雇用者は非常に少なく、何らかの自営業、とくに農業や牧畜で生活の糧を得ている者が多い。

しかし、マイノリティ帰還者の残留はこれらの二つの要因だけで支えられているのではない。彼らの話を聞き、また実際の行動を観察していると、プラスアルファの要因がいくつかあるように思われる。ここではこれを「付加的な要因」と呼びたい。

その一つはある種の「生活上のたくましさ」ないし「ヴァイタリティー」と呼ぶべきものである。それはいいかえると、生き延びるためには何でもやる意欲と能力である。たとえば、モスタールのバーチェヴィチ地区のドゥーシャン・ゴーロ氏の妻ラドミーラである。内戦前に普通のOLであった彼女は43歳の年齢でサライェヴォの警察学校に入校し、警察官となった。危険な任務を伴う仕事であったが、あえて挑んだのは当時の状況ではそれが唯一の安定雇用への道であったからである。警察官の職を得てから彼女は家計の支え手になり、幼い子どもと無職の夫を扶養した。このほかに中古のトラクターを安値で購入し、自分で修理して使用しているゴラン・パラヴェストラ氏（モスタールのホードビナ地区）、5人の子どもを含め家族総出で農業生産に従事するミラディン・エクメチッチ氏の一家（チャプリーナのプレビロフチ地区）も生活上のたくましさを感じる人びとの好例である。

しかし、今回の調査地域の中でもっともヴァイタリティーを感じさせられたのはドゥルヴァール郊外のヴェリキ・オーチイェヴァに住む帰還者である。彼らは帰還後に電気なしで暮らしてきた。発電機もなく、電池を電源とするもの以外の家電製品は使用できない。冷蔵庫もなければテレビも

ない。短い人で6年、長い人で15年、そのような生活を続けている。このような困難な生活条件の下でも住民はしぶとく生き延びている。しかも住民の表情は明るく、外部の訪問者にそれほど苦労していると感じさせない点がすごい。

付加的な要因の第2はコミュニティ（共同体）の存在である。あるいは、血縁、地縁、信仰上の共同体などゲマインシャフト的な関係の存在と言ってよい。ボスニア・ヘルツェゴヴィナの家庭では親子兄弟の結びつきが非常に強い。帰還者の家庭で子どもが他出し、国内外で働いている場合にはたいていの場合、実家に仕送りをしている。それによって帰還地域に残留するマイノリティ住民は自らの収入の低さを補っている。しかし、今回の調査地域では子どもから仕送りを受けて生活している世帯の事例はなかった。その代わりに強く感じたのは近隣の人びととのつきあいが濃密であり、この関係に基づく相互扶助が日常的におこなわれていることである。たとえば、モスタールのホードビナ地区で訪問した3軒の世帯はそれぞれに同じ職場で働いていた男性がいた。その夫人同士（イェレナさんとミリヤーナさん）も非常に仲がよく、子どもを含めて家族ぐるみで頻繁に行き来をしている。またドゥルヴァール郊外のヴェリキ・オーチイェヴァの住民は日中に暇があれば集って語らい、困ったことがあれば相互に助け合う。彼らはまるで一つの家族のような生活をしている。

付加的な要因の第3は「故郷への特別の思い」ないし「エートス」である。これには二つのものがある。一つはここが自分の故国であり、故郷だという思いである。この思いは慣れ親しんだ土地で生活したいという願いにつながり、避難をした人びとにとっては元の居住地へ帰還する際に大きな動機になった。それはいいかえると、昔からの知り合いや親戚がいる場所で伸び伸びと暮らし、安心感を得たいという気持ちである。このような考えは特に年配の人びとの間で強い。帰還者の中には親世代のそのような願いをかなえるために郷里に帰還した人も多い。たとえば、ドゥルヴァール郊外のヴェリキ・オーチイェヴァのドラガン・ローディッチ氏とミロラド・ローディッチ氏がそうである。

もう一つはある種の民族的な使命感である。今回の調査地域はいずれもセルビア人が数百年にわたって居住してきた地域であった。それゆえ、帰還者の中には先祖代々の故地を守っていかなければならないという使命感を持った人が多い。たとえば、モスタールのヴラプチッチ地区のヴラード・ヴーチッチ氏はそのような使命感を強く持った人である。彼はこの土地がセルビア人の故地であることを示すシンボルとして墓地を維持していかなければならないと考えている。同様にモスタールのバーチェヴィチ地区のドゥーシャン・ゴーロ氏からもセルビア人の故地を残していくことはセルビア人の魂を守ることであり、セルビア人の使命だという話を聞いた。

しかし、このような使命感をもっとも強く持つ帰還者はチャプリーナ郊外のプレビロフチ地区のセルビア人である。プレビロフチは第二次世界大戦中にクロアチア人の民族主義団体（ウスタシャ）によって大半の住民が虐殺され、生き残った住民が戦後に再建した集落である。この地区はこのたびの内戦中にクロアチア人勢力によって再び民族浄化の対象になり、すべての住民の住宅は破壊され、ゴーストタウンとなった。しかし、内戦後に住民の一部はセルビア人の故地を守るために帰還し、住宅を再建、農業を基本に生活の再建のための努力を続けた。晩婚だが5人の子どもをもうけたミラディン・エクメチッチ氏の家庭を始め、帰還後に子どもが生まれた世帯が多いことの背景にはこの地域を次世代に残さなければならないと考える彼らの強い思いがある。

ここまではマイノリティの帰還者の残留に関してモスタール郊外の帰還地域とドゥルヴァール郊外の帰還地域に共通に見出される要因を指摘した。しかし、二つの帰還地域における住民生活のあり方には明らかに大きな相違がある。チャプリーナのプレビロフチを含めてモスタール郊外の帰還地域には高齢の年金生活者だけでなく、子育て世代の帰還者および残留者が存在する。内戦後に生まれた帰還者の子どもたちも成長している。このような事態はドゥルヴァール郊外の帰還地域にはきわめてまれであった。ここでは帰還者の子どもはすでに中高年者であり、未婚の男性が多

い。端的に言えば、モスタール郊外の帰還地域では世代の再生産のサイクルが見えている。ドゥルヴァール郊外の帰還地域では今のところそのような可能性が見通せない。

この違いはどこから来るのか。私見によれば、それはコアとなる都市、モスタールとドゥルヴァールの活力および居住環境の違いに由来する。具体的には次の五つの点でモスタールはドゥルヴァールよりもずっと優れている。第一に人口規模である。モスタールは2013年の人口は113169人、内戦前の1991年に比べて15000人程度減少したが、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは５番目に大きな都市である。モスタールはまたヘルツェゴヴィナ＝ネレトヴァ県の県都であり、ヘルツェゴヴィナ地方では最大の中心都市である。これに対し、ドゥルヴァールはヘルツェグ・ボスナ県の中心都市の一つであるが、2013年の人口は7506人、内戦前の1991年の人口17126人に比べて半分以下に減少した。ドゥルヴァールの人口の減少度はモスタールのそれに比べてずっと大きい。

第二に就業機会である。両都市は内戦中から内戦後に重要な企業が閉鎖や損害、縮小などの影響を受け、雇用が大量に喪失した。そのため、両都市共に雇用情勢は慢性的に悪い。失業者の数はモスタールでは2014年7月に16541人、ドゥルヴァールでは2013年に推計で約1500人である[20]。それでもモスタールにはまだ就業機会が存在する。民間部門では中小企業が伸び、サービス業や小売業の店舗も多い。銀行の支店は28あり、いくつかの著名な外資系銀行が支店を置いている[21]。これに対し、ドゥルヴァールの中心街では営業している店舗は少なく、日中でも閑散としている。さらにモスタールでは不足している専門職がいくつかある。もちろん、数の上では狭き門であるが、それに狙いを定めて職業・技能資格を取得し、求職活動をすれば就職の可能性がある。バーチェヴィチ地区のドゥーシャン・ゴーロ氏の妻ラドミーラ（警察官）とその長女スラージェナ（図書館司書）はそのような考えに立って計画的に行動し、安定した職を射止めた。ドゥルヴァールのNGO（「RRS：地域発展サービス」）でこの町で同様の可能はないかと尋ねたところ、プロプロジェクト・マネージャーのヨヴィチッチ氏はドゥルヴァールではそのような機会はないと回答した。

もう一つの優位点はモスタールがボスニア・ヘルツェゴヴィナ有数の観光都市であることである。山地が多いボスニア・ヘルツェゴヴィナの中ではモスタールは珍しく平地にあり、気候は温暖である。市内には首都サライェヴォとクロアチアの観光地スプリット・ドゥブロヴニクを結ぶ幹線道路が走り、鉄道駅と空港もある。旧市街には世界遺産の「スターリ・モスト」を始め歴史的・文化的なモニュメントが集積し、見所が多い。また近郊にも豊かな自然と景勝地があり、教会や修道院など信者が訪れる場所もある。そのため、モスタールは季節を問わず、鉄道や長距離バス、チャーター便などによって国内外から多くの旅行客を受け入れている。したがって、観光関連のサービス業（飲食店、ホテル、土産物売りなど）ではそれなりに起業・就業の機会がある[22]。これに対し、ドゥルヴァールの著名な観光スポットと言えば今のところ、第二次世界大戦中にパルチザンの指揮官であったチトーが司令部を置いていた山腹の洞窟（Titova pećina）くらいである。

第三に消費市場である。モスタールには10万人を超える居住者がいる。観光客も多く、飲食店やホテルからの食料品に対する需要がある。これは郊外の農業従事者にとっては大きな利点である。農産物を市場で販売し、現金収入を得る機会ができるからである。モスタールのオルティイェシュ地区の専業農家ニコラ・カラデグリヤ氏とミラン・メダン氏の世帯、チャプリーナのプレビロフチ地区の専業農家ライコ・ブルート氏とミラディン・エクメチッチ氏の世帯が農業で成功を収めているのは、彼らの居住地域の周辺に大きな消費市場があってのことである。これに対し、人口が少ないドゥルヴァールには大きな消費市場が存在しない。そのため、生産物を販売して現金収入を得る機会が小さく、彼らの農業は自家消費用の食料生産の性格が強くなる。

第四に教育環境である。モスタールでは様々なレベルと内容の高等教育を受けることができる。市内には経済・商業科、医学看護科、工業科、交通科など各種の中等学校がある。市街地の

中心部には伝統のあるギムナジウム（普通科の中等学校）がある。その建物は内戦中に損傷を受けたが、内戦後に立派に再建された。さらに公立の総合大学が二つもある。一つはクロアチア人が支配する西部地区にキャンパスを持ち、11学部に16000人の学生が学ぶモスタール大学（Sveuciliste u Mostaru）であり、もう一つはボシュニャク人が支配する東部地区にキャンパスを持ち、8学部に12000人の学生が学ぶ「ジェーマル・ビイェディッチ」モスタール大学（Univerzitet "Džemal Bijedić" Mostar）である。ヴラプチッチ地区のミラン・アンテリ氏の孫のセレーナ・スーシャやバーチェヴィチ地区のミロスラヴ・ゴーロ氏の娘のヨヴァーナがモスタールでの将来設計を描くことができるのも、比較的良好な就業機会に加えて、地元で大学までの進学の機会が存在するからである。これに対し、ドゥルヴァールでは中等学校はあるが、大学教育は遠方の都市に行かないと受けられない。

第五に医療環境である。モスタールには大きな総合病院が二つある。一つはクロアチア人系のモスタール大学附属病院（Sveučilišne kliničke bolnice Mostar）である。もう一つはボシュニャク人系の「サフェト・ムイッチ医師」地域医療センター（Regionalni medicinski centar "dr. Safet Mujić"）である。これに対し、ドゥルヴァールにも病院はあるが、その正式名称は病院ではなく「保健センター」（Dom Zdravlja）である。わかりやすく言えば健康管理センターである。そこでは健康診断や応急措置的な治療、出産のための入院はできるがそれ以上のことはできない。設備もなく、専門の医療スタッフもいないからである。ドゥルヴァールの住民は各種の精密検査や手術などより高度な医療処置を受けようとするならば遠方の都市に出かける必要がある。

このような事情から、モスタールの帰還地域では帰還者が残留しているだけでなく、世代的な再生産のサイクルが見通せるようになっている。そのため、内戦中にモスタールを去ったセルビア人住民の中には今なお帰還を強く希望する者が多い。本稿では紹介できなかったが、私はモスタールとその周辺地域から逃れたセルビア人がもっとも多いネヴェーシニェで多くのセルビア人住民に話を聞いたことがあるが、彼らはすべて元の居住地への帰還を心底から望んでいた。彼らが帰還できないのは破壊された住宅の再建ができないためである。そのため、彼らは政府が行っている家屋の再建の助成金の募集に毎年応募し、それが交付されるのを心待ちにしている。逆説的だが、生活条件がよいためにモスタールでは難民の帰還のプロセスは終了していない。

ところで、都市としての活力では劣るが、ドゥルヴァールにはモスタールに優る点が一つある。それは基礎自治体の政治権力をセルビア人が握っていることである。これはこの町ではセルビア人の人口が圧倒的に多いので、選挙をすれば必ずセルビア人の代表が首長に選ばれ、基礎自治体の議会もセルビア人が多数を占める結果になるからである。もちろん、県レベルの政治と行政機構はマジョリティ民族のクロアチア人が支配しており、彼らの意向や裁量によって基礎自治体レベルの政策決定は大きな制約を受けている。しかし、基礎自治体の政治と行政機構をセルビア人が握っていることはドゥルヴァールに帰還したセルビア人に大きな安心感を与え、場合によっては様々な便宜供与を期待できるので、帰還住民の残留を支える要因の一つになっているように思われる。

これに対し、モスタールでは人口比率が小さいセルビア人は基礎自治体の政治からほとんど排除された状態にある。定員の35の市議会にはセルビア人の議員は5人いる。しかし、彼らはクロアチア人ないしボシュニャク人の政党に属する議員であり、セルビア人住民の利益の代表者として行動することを期待できない。そのため、セルビア人住民はクロアチア人やボシュニャク人に比べて様々な側面で不利な取り扱いを受けている[23]。モスタールにおけるセルビア人帰還者の世代的な再生産が本格的な軌道に乗るためにはこのような状況が改善される必要があるように思われる。

注

1 セルビア人勢力とボシュニャク人・クロアチア人勢力との間で構成体の領域の合意ができなかった

地域があり、それは特別の自治行政区に指定された。これが面積493k㎡のブルチコ行政区（Brčko distrikt）である。同地区はボスニア･ヘルツェゴヴィナ連邦とセルビア人共和国の双方の領土に属するとされる。しかし、ブルチコ行政区は基礎自治体であるが、独自の行政府と立法機関を持つ。

2 ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける民族浄化のプロセスがどこまで元に戻ったのかを研究している地理学者のジェラルド・タールとカール・ダールマンは「民族浄化は成功したか？ ―ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおけるマイノリティの帰還の地理学とその意味―」という論文の中でその調査結果を次のように結論付けている。「オープシュティナ（基礎自治体）のレベルでみた場合に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナがかつてのように多民族的な社会ではないのは争う余地のない事実である。しかし、ボスニア・ヘルツェゴヴィナはアパルトヘイト的な地理学的政策（an apartheid political geography）が支配的であった戦後直後の状態に比べると、はるかに多民族的な性格に戻っている。2006年のボスニアは1991年の多民族社会と1996年のアパルトヘイト社会の中間にある。少なくとも人口学的にみた場合に民族浄化は成功していないが、さりとてそのプロセスは元に戻っていない。明確に同質的な民族のホームランドは形成されていない」（Gerard Toal and Carl Dahlman, “Has Ethnic Cleansing Succeeded? Geographies of Minority Return and Its Meaning in Bosnia-Herzegovina”, in Dayton Ten Years After : Conflict Resolution, Co-operation Perspectives, edited by Anton Gosar, Primorska, Slovenia, 2006, p.20）。

3 UNHCR, Briefing Note on UNHCR and Annex 7 in Bosnia and Herzegovina, 2007.

4 Etnička obilježja stanovništva, rezultati za republiku i po opštinama 1991, Zavod za Statistiku Republike Bosne i Hercegovine, 1993.p.17.

5 HVOは1994年1月にネレトヴァ川に架かる橋の一つであり、15世紀に建設された石橋であるスターリ・モスト（現地語Stari Most、英語でOld Bridge）を爆破した。この橋はその美しさから、平和時には多くの観光客が集う、世界的に有名な石橋であった。同じ時期に3人のイタリア人ジャーナリストがHVOの砲撃により死亡した。国際メディアはこれらの事件を大きく報道し、悪玉に仕立てられたクロアチア人勢力はいっそう立場が悪くなった。

6 デイトン和平協定の後、モスタールの内部には6つの基礎自治体（općna）が設置された。クロアチア人勢力は南区（Mostar Jug）、西区（Mostar Zapad）、南西区（Mostar Jugozapad）を支配し、ボシュニャク人勢力は北区（Mostar Sjever）、旧市街区（Mostar Stari Grad）、南東区（Mostar Jugoistok）を支配した。なお2004年に6つの基礎自治体は廃止され、モスタールは外形的には1つの基礎自治体となった。しかし、実質的な東西の分断は今なお続いている。

7 Agencija za statistiku Bosne i Hercegovine, Preliminarni rezultati Posisa stanovništva, domaćinstava i stanova u Bosni i Hercegovini 2013.

8 Nakon popisa nema podjela: U Mostaru ima Bošnjaka i Srba više od Hrvata, Vijesti.ba,28 Oktober 2013.

9 なお2014年7月の訪問時にヴラード・ヴーチッチ氏から聞いたところでは、ミラン・アンテリ氏の長女のヴァーニャ・シーミッチは私が訪問した前年翌月の2013年8月に死亡した。それほど容態はよくなかったということである。

10 ただし、クロアチア人の住む地区に見学に行ってよいかとドゥーシャン・ゴーロ氏に尋ねたところ、それは控えてほしいと彼は私に述べた。彼らには彼らの生活があるのでそれに干渉するようなことはできないからだという。そのため、私は遠くから写真を撮影するにとどめた。

11 ワインは1リットル7KM、ラキヤ1リットル4KMで販売している。スーパーで販売されている製品の最安値と比べても半値以下の価格である。もっともワインとラキヤの製造販売は政府に登録する必要があり、一家の販売は密造酒に該当する。

12 ネージェ・スイェラン氏は内戦前にモスタールの建設会社で大工として働いていた。内戦中はモンテネグロに避難し、建設作業労働者として働いた。彼の住宅は内戦中に完全に破壊された。内戦後は帰還を断念し、現在はセルビア人共和国のビレチャ（Bileća）に居住する。家族は妻と4人の子どもがいる。ホードビナの兄の住宅には時々やってくる。

13 エクメチッチ氏の内戦前の企業での勤続年数は16年である。年金を受給するための最低限の勤続年

数は20年であるため、あと4年足りない。これはバーチェヴィチのドゥーシャン・ゴーロ氏と同様のケースである。2014年7月の訪問時に私はドゥーシャン・ゴーロ氏の話を紹介し、4年分の掛け金を追納する意思はないかとエクメチッチ氏に尋ねた。これに対し、今は子どもの教育費にお金がかかるのでそのような余裕はないとエクメチッチ氏は語った。

14 第二次世界大戦中の一時期、ドゥルヴァールにはパルチザンの総司令部が置かれていた。戦況の打開を狙ったドイツ軍はパルチザンの総司令官であったチトーの殺害を企画し、約900人の精鋭を集めて落下傘部隊を組織した。1944年5月25日の未明にドイツ軍はこれを上空から投下し、パルチザンの総司令部を急襲させた。しかし、作戦は成功しなかった。チトーは負傷したが、脱出することができた。これは「ドゥルヴァールの降下」(Desant na Drvar）呼ばれ、パルチザン戦争の中では有名な事件である。チトーが潜んでいた山腹の洞窟はこの町の観光スポットになっている。

15 サライェヴォの非政府組織「ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける持続的帰還と統合のための連合 」(Unija za održivi povratak i integracije u Bosni i Hercegovini）の調査結果によると、2012年の時点でドゥルヴァールに帰還した者は9183人であった。2013年実施の人口調査の結果よりも1700人近く多い。これは帰還しても定住していない人が相当数いることを示唆している。

16 政党では同氏は、セルビア人共和国大統領のミロラド・ドディック（Milorad Dodik）が党首を務める独立社会民主同盟（Savez nezavisnih socijaldemokrata：SNSD）に所属する。パーパク・ドディグ氏は2012年8月に任期を2ヶ月残し、首長の職を辞職した。理由はヘルツェグ・ボスナ県（通称カントン10）政府の経済産業相に就任したためである。パーパク・ドディグ氏の夫（1954年生）は公共企業（発電所）に勤務し、息子（1988年生）と娘（1989年生）は共にバニャ・ルーカ大学で法律を学んでいる。

17 ところが、その後の現地の報道によれば、フィンインヴェストは2013年1月に操業を停止し、約350人の従業員は事実上、職を失った。従業員には9ヶ月分の給料が未払いであり、社会保険料や県税の支払いも長く滞納したままだった。所有者のクロアチア人はクロアチアに逃亡したという。以上、サライェヴォのポータルサイトKlixに掲載された記事（Finvest iz Drvara zatvorio kapije, ostavio "armiju" nezaposlenih（「ドゥルヴァールのフィンインヴェストはその通用門を閉じたが、外に失業者の大軍を外に残した」,http://www.klix.ba/biznis/finvest-iz-drvara-zatvorio-kapije-ostavio-armiju-nezaposlenih/130104006）による。

18 この集落はかつてドゥルヴァールの一部であったが、内戦後に行政区画が変わり、カントン1のビハーチに所属することになった。しかし、住民の生活圏はドゥルヴァールの中にある。買い物にせよ、病院への通院にせよドゥルヴァールに出かけることが圧倒的に多い。ただし行政上の手続きは遠方のビハーチに行く必要があり、その点で大変不便を強いられているという。

19 もちろん、これは一つのパターンである。避難民の住宅は破壊されていた場合と破壊されずにマジョリティの住民によって占拠されていた場合がある。その場合には避難民は住宅の返還、つまり占拠者の立ち退きを法律に従って求め、それが実現するのを待った。ただし、住宅が破壊されずに占拠されているのはたいてい都市部の住宅である。今回の調査地域はすべて郊外地区であり、そこではマイノリティ住民の住宅はすべて放火されたり、破壊されたりしていた。

20 モスタールの失業者数はモスタールの就業斡旋局の公表値（Služba za zapošljavanje HNŽ/HNK Mostar, Statistički bilteni za Kolovoz 2014 godinu）による。ドゥルヴァールの失業者数は次の記事からの推計である。Finvest iz Drvara zatvorio kapije, ostavio "armiju" nezaposlenih（「ドゥルヴァールのフィンインヴェストはその通用門を閉じたが、外に失業者の大軍を外に残した」,http://www.klix.ba/biznis/finvest-iz-drvara-zatvorio-kapije-ostavio-armiju-nezaposlenih/130104006）.

21 ドゥーシャン・ゴーロ氏（モスタール郊外のバーチェヴィチ地区）の長女の夫プレドラグが勤めているイタリア資本のウニクレーディト・バンクはその一つである。その他に同じくイタリア資本のインテサ・サンポーロ・バンカ（ntesa Sanpaolo

Banka)、オーストリア資本のライフファイゼン・バンク（Raiffeisen Bank)、スロヴェニア資本のヒポ・アルペーアドリア・バンク（Hypo Alpe-Adria-Bank)、セルビア人共和国資本のノヴァ・バンカ（Nova Banka）など首都サライェヴォにある銀行のほとんどはモスタールに支店がある。

22 たとえば、モスタールの市街では首に手製の証明書をぶら下げて観光ガイドをしている人もいる。これはもっとも簡単な起業の例である。

23 その最たる例が就職である。縁故主義（Nepotizam）が根強いボスニア・ヘルツェゴヴィナの社会では、就職はコネクションで決まることが多い。その場合、もっとも強いのは政党所属によるコネクションと家族関係に基づくコネクションである。セルビア人は政治的な代表を持たないため、コネクションによる就職は難しい。モスタールのオルティイェシュ地区のミラン・メダン氏は、外交官の仕事を目指す長男のステファンのために知人のつてをたどり懸命に運動をしているが、なかなかうまくいかないと嘆いていた。このことはその一例である。